

小宰相の哀話と藤原定家

尾崎 勇

末代の道理から慈円周辺圏へ——序にかえて——

『新古今和歌集』（巻第一六・雑歌上）には、

世をのがれて後、四月一日、上東門院、太皇太后宮と申しける時、
衣替への御装束奉るとて

法成寺入道前摂政太政大臣

唐衣花の袂に脱ぎ替へよわれこそ春の色は断ちつれ

(二四八二)

との歌が採られている。藤原道長が娘の彰子に贈った歌であつて、『栄花物語』（巻第一五・うたがひ）に載っている、

かくて三月晦日に、例の宮々の御更衣のども奉れさせたまふこと、今しもおこたせたまふべきこと
ならず、みな分かちたてまつらせたまふとて、大宮に唐の御衣にそへさせたまへる、

唐衣花のたもとに脱ぎかへよわれこそ春の色はたちつれ

(八)

に依拠している。後鳥羽院の下命により設置された和歌所の空間には『栄花物語』が存在し、本書を定家は弁えていたからであつた。^[1]

比叡山延暦寺の別所の西山にある本寺の善峯寺の北尾に建っている往生院の第三代院主の慈円は、「世継物語」の系譜を継承した「いくさ物語」を企画・創出させる。それが慈円圏であつた。具体的には嘉応二年（一一七〇）

の執政の「臣」の藤原基房と平家側との衝突の事象から始発させてより、源頼朝が旗揚げよりの源平争乱の顛末を詳細に描いた原『平家物語』の『治承物語』であった。「世継物語」の系譜を引きつぐ「頼朝の物語」を内実とする『治承物語』を創出させた慈円園に定家も参画したのである。⁽²⁾

「世継物語」の最初の『栄花物語』は、編年体で宇多天皇の即位から藤原道長讃仰と一族の摂関政治の権勢の途を正編の三十巻では辿っている。『栄花物語』の影響を承けつつ異なる趣向で道長の栄耀栄華の由来を追尋しながら文徳天皇の嘉祥三年(八五〇)から、後一条天皇の万寿二年(二二〇五)まで紀伝体で仕上げたのが『大鏡』であった。万寿二年より高倉天皇の嘉応二年(二二七〇)までを、やはり紀伝体を基本とした『続世継』すなわち『今鏡』がある。現在の『今鏡』研究ではほぼ確定している作者の寂超(俗名は藤原為経)は、定家の父の俊成が撰進した『千載和歌集』には歌三首が採られている。すなわち、

命をば逢ふに替へんと思ひしを恋ひ死ぬとだに知らせてしがな

(七三四)

久方の月ゆゑにやは恋ひそめしながむればまづ濡るゝ袖かな

(九三〇)

大品経の常啼菩薩心の心をよめる

朽ちはつる袖にはいかゞ包まましむなしと説けるもみ法ならずは

(一一三三)

七三四番歌の下の句で「せめて恋ひ死するということだけでもあの人に知らせた」と詠じた。九三〇番歌も上の句で「月」に掛る枕詞で人の恋を詠じた熱情のこもる歌なのである。一一三三番歌は典型的な釈教歌であつて、仏教修者に説く小乗に対してあらゆる衆生に向けての大乗の教えの根本経典の『般若経』に則っている。それには十種以上の系統を異にするものがあつて、初訳とされる『大品般若経』に説かれている「空」とは、固定的実体の無いマイナスの概念と存在・言葉・現実・人間・世界そのものの免れえない限界と自己矛盾を反映させ、同時に絶対への志向をはらんだ教義である。寂超は、その教義をもとに「空しいと説いた教典なので、朽ち果てた袖にも包むことができるのだ」と詠じており、これは後述する小宰相の入水自死の顛末と呼応している。

『今鏡』に「五部の大乘、大般若などだにありがたく侍るに、」(ふじなみの中第五「水荳」と見えており、他方、「ま

た末つ方にときめかせ給ひしはらにおはする、山の法眼など申してきこえ給ふ。」(ふじなみの中第五「浜千鳥」)では慈円に言及している(以下ことわらない限り、傍線・圈点は筆者尾崎が施した)。比叡山延暦寺内部に通曉していた寂超は、「止観の一卷を置きてさし出ださせ給ださせ給ひて、」(すべらぎの中第二「御法の師」)・「天台の止観とかいふ書を、」(ふじなみ上第四「宇治の川瀬」)とし、慶滋法胤の事蹟から、

……年たけてぞ頭剃して、横河に上りて、法文習ひ給ひけるに、増賀聖、まだ横河にすみ給ひけるほどにて、「止観の明静なること、前代に未だ聞かず」と読み給ひけるに、この入道ただ泣きに泣きければ、聖、「かくやはいつしかなくべき」とて、……

(むかしがたり第九「まことの道」)

と描く。寂超の妻(美福院加賀)は俊成と再婚して定家を生んだ。『弥世継』(散逸)の作者は、寂超の子の隆信であつて、定家の異父兄にあたるので、「世継物語」の系譜と縁戚関係からも慈円圏への定家の参画していく一因になるであろう。『明月記』寛喜二年(二二三〇)八月十二日条に「午上に、止観十巻校し訖んぬ。」と記載している。後述する慈円周辺圏に定家が参画していく八年前の仏事善行であつた。その二年後の天福元年(二二三三)十月十一日に定家は出家したのである。

『治承物語』を企画・創出させた慈円から窺つてみよう。

『愚管抄』別帖の冒頭で、

保元ノ乱イデキテノチノコトモ、マタ世継ガモノガタリト申モノモカキツギタル人ナシ。少々アルトカヤウケタマハレドモ、イマダエミ侍ラズ。ソレハミナタバヨキ事ヲノミシルサントテ侍レバ、保元以後ノコトハミナ乱世ニテ侍レバ、ワロキ事ニテノミアランズルヲハバカリテ、人モ申ヲカヌニヤトオロカニ覚テ、

(巻三——二二九ページ)

保元の乱勃発より以降の「乱世」すなわち別帖の鳥羽天皇の条での周知の言辭である、

保元元年七月二日、鳥羽院ウセサセ給ヒテ後、日本國ノ乱逆ト云コトハヨコリテ後ムサノ世ニナリニケルケリ。コノ次第ノコトハリヲ、コレハセンニ思テカキヨキ侍ルナリ。

(巻四——二〇六ページ)

「武者ノ世」そのものを「世継物語」では描いていないとする。『大鏡』が語り終えた後一条天皇の万寿二年(二二〇五)より半世紀後の久寿二年(二二五五)四月十五日生誕である慈円は、嘉応二年(二一七〇)まで十五年は自己の境涯と重なっている。『今鏡』をも念頭に置きつつ、自身が創出させた嘉応二年よりの『治承物語』を『愚管抄』に採用していったことを併せながら、別帖の冒頭部で施線部で「ワロキ事ニテノミアランズルヲハバカリテ、人モ申ヲカヌニヤトオロカニ覚テ」と揚言するので、見えを切る叙述姿勢となつていよう。そのことは別帖の土御門天皇の条に、

山ノ座主慈円僧正ト云人アリケルハ、九條殿ノヲト、也。ウケラレヌ事ナレド、マメヤカノ歌ヨミニテアリケレバ、攝政トヲナジ身ナルヤウナル人ニテ、「必マイリアヘ」ト御氣色モアリケレバ、ツネニ候ケリ。院ノ御持僧ニハ昔ヨリタグヒナクタノミヲブヴォシメタル人ト聞ヘキ。

(巻六——二八七ページ)

施線部で含羞しているような思念を介在させて、後鳥羽院に歌人として信任されている自己を捉えるからである。そのうえ歌人としての側面をみても、『治承物語』を遺存している屋代本の「月見」の章段では、寂れた旧都の悲哀を充溢させつつ、

……旧都ノ荒行ヲ、今様ニコソウタハレケレ。
旧キ都ヲ来テミレハ浅芽力原トソ荒ニケル
月ノ光ハクマナクテ秋風ノミソ身ニハシム
ト、推返く二三反ウタヒスマサレタリケレハ、……

(巻五「徳大寺左大将実定卿旧都近衛河原皇太后宮大宮御所被参事」)

今様うたう実定の形象には、雄叫びと馬蹄の響かせる「源氏勢ハ重ナレハ、平家勢ハ落行。中略 源平時ヲ作ル。其声ハ、上ハ梵天マテモ聞ヘ、下ハ海竜マテモ驚覽トゾ覚タル。源平乱合テ数刻戦ニ、白雲一村源氏ノ上靡テ……」(巻二「長門国壇浦合戦」)に至る、いわば源平両軍の激突から源氏軍の勝利の「組曲」への不可欠な「前奏曲」ともなつていく。³⁾ 慈円が創出させた『治承物語』の構造から、『愚管抄』の別帖の冒頭は後述するように『新

古今和歌集』の代表的歌人としての慈円のアンビバレントな修辞であったことなるう。

後鳥羽院の下命によつて『新古今和歌集』編纂が始発すると、和歌所の寄人には慈円とともに定家もくわえられ、我が日録の『明月記』元久元年（二二〇四）七月二十二日条に、

今日、撰歌の部類を始めらるべし。和歌所に参すべき由、一昨日催し有り。仍て参入す。

とあり、以下、翌日よりの歌の配当や配列の切継作業について詳細に記載しており、元久二年（二二〇五）三月二十六日の終功の宴にも、定家は招聘され、

竟宴に猶参すべき由、仰せらる。仍て三条坊門に行く。

さらに、同月二十八日には、

勅撰猶見るべき由、仰せ事有り。仍て少々引き見る。（中略）哀傷の部の二首、除くべからず。相並べて入るべし。

改訂の切継が行われ、建保四年（二二二六）十二月二十六日、『新古今和歌集』編纂実務担当の藤原家長が最終的本文を清書したのは、西山の慈円圈で『治承物語』の創出されている時期と一致してもいる。承久元年（二二一九）頃に『愚管抄』別帖に『治承物語』を取用しながら慈円は「武者ノ世」を叙述していくのであった。本説取りの歌の修辞に則つて『治承物語』を取り込んでいたので、別帖の嘉応二年からは、種々の道理と『治承物語』とがせめぎあい、輻輳して文章がきわめて晦渋になつてしまつて^[4]いる。そのことと『愚管抄』別帖の冒頭の筆致とは類同するわけである。

『愚管抄』付録の前半部である「史」の論の趣旨は、道家の子息の三寅こと九条頼経の將軍継嗣を説論することである。皇帝年代記の仲恭天皇紀では道家の姉の立子から生誕した仲恭天皇の摂政に道家が就いたことを「道理必然」として^[5]いる。この二つの事象が未代の道理の枢要に据えられ、「冥顕二法」の道理と仏法王法相依の道理として慈円は『愚管抄』を成立させた。現今の治世を肯定するので別帖冒頭の「ワロキ事ユテノミ（中略）世モミダレヲダシカラヌ」ではなくなつたから、既述したようにアンビバレンスなのである。そのことは別帖の

八十三代土御門天皇の条に、

其建永二年ノ四月五日、久シク病ニネテ起居モ心ニカナハズ、臨終ハヨクテウセニケリ。

サテ故攝政ノムスメハイヨクミナシ子ニ成テ、ヨロツコトタガイテ、イカニト人モ思ヒタリケレドモ、サヤウニヲビシメシテアリケル上ニ、春日大明神モ八幡大菩薩モカク、皇子誕生シテ世モ治マリ、又祖父ノ社稷ノミチ心ニイレタルサマハ、一定佛神モアハレニテラサセ給ヒケント、人皆思ヒタル方ノスエトホル事モアルベケレバニヤ、承元三年三月十日、十八ニテ東宮ノ御息所ニマイラレニケリ。セウトニテ今ノ左大將、ヲトナニハ遙カニマサリテ、何ゴトモテ、ノ殿ニハスギタリトノミ人思ヒタレバ。メデタクサタシテマイラセ給ニケルナリ。

(巻六——二九六ページ)

兄の兼実が寂した事象に関連させながら、施線では宗廟神と社稷神とのはからいを道理と揚言している。「冥顕二法」の道理である「冥」の側で建保六年(二二八)十月十日に立子から懐成親王(未代の道理の一つである八十五代仲恭天皇の即位)が誕生するまでを先説し、次に即位した八十四代の「君」である順徳天皇の条に及ばせて、

其次ノ年ノ正月ヨリ又御懷妊ト聞ヘテ、十月十日寅ノ時ニ御産平安、皇子誕生思ノゴトクノ事出キニケリ。上皇コトニ待ヨロコバセ給テ、十一月廿六日ニヤガテ立坊有ケリ。清和ノ御時ヨリ一歳ノ立坊定マレル事也。カ、ルメデタク事世ノ末ニ有ガタキ事カナ。猶世ハシバシアランズルニヤナド、上中下ノ人々思タリケリ。御堂ノ御ムスメニテ上東門院、一條院ノキサキニテ、後一條・後朱雀院ニトコロノ母后ニテ、(中略)此中宮、後京極殿ムスメニテ、カクハジメ姫宮、後二皇子ニテ、東宮ニタ、セ給フ。返く有ガタキ事也。

(巻六——三〇六〜三〇七ページ)

藤原基房が五十六代清和天皇の最初の摂政になった往時すなわち摂関政治の治世の始まりから、六十九代後朱雀天皇の外祖父である執政の「臣」である道長までを「顕」の側から鳥瞰したのであった。道長の直系である良経の娘の立子から生誕した懐成親王の立坊の事象を慶事として捉え、同親王が二年後の承久三年(二二二)三月二十日に仲恭天皇として即位したことで、皇帝年代記の仲恭天皇紀に、「母中宮立子。」(巻二——二三ページ)に

併せて「攝政左大臣道家。受禪同日為攝政。」と嵌入した。要するに、立子の弟である九条道家（一一九三〜一二五三）が摂政に就いた事象へ収斂させていき、付録前半の「史」の論では道家の三男の頼経が四代鎌倉將軍繼嗣になったことを批評して括った文で、

最眞實ノ世ノナリユクサマ、カキツケタル人ヨモ侍ラジトテ、タゞ一スヂノ道理ト云コトノ侍ヲカキ侍リヌル也。
（巻七——三四三ページ）

としたのと照応する。この慈円の道理史観は、慈円圏で創出させた『治承物語』を遺存している屋代本の「月見」の章段に於ける今様をうたう実定の形象に源氏軍の勝利の雄叫びと馬蹄の響かせるアンビバレンスの物語にそのまま通じていよう。

『愚管抄』の末代の道理から慈円周辺圏をみておこう。

建永元年（一二〇六）三月に執政の「臣」である甥の良経の頓死、その翌年四月には兄の兼実が世を去って九条家の家運が後退したことをはかなんだ慈円は西山に隠棲し、既述したように慈円圏を組織して『治承物語』を創出させていく。隠棲し始めた承元元年（一二〇七）十一月三十日に四天王寺別当に就いている。西山隠棲時に太子信仰（聖徳太子の遺言とされる『荒陵寺御手印縁起』では四天王寺の興隆に尽瘁するものには家運の興隆がもたらされるとの教えがあったからである。）へ傾斜しはじめ慈円は、終生に亘つての胸底に強固に抱いていく。⁽⁶⁾ 承久の乱で末代の道理の一翼を担う道家は執政の「臣」を解任されたが、慈円は寂する前年の貞応三年（一二三三）正月に「聖徳太子願文」では「幼主之重祚」すなわち仲恭天皇が再び皇位に就く事・「摂政之還補」すなわち道家が「臣」に返り咲く事・「上皇御帰洛」すなわち後鳥羽院が帰洛して廟堂に復歸する事・「將軍之成人」すなわち四代鎌倉將軍繼嗣として下向した九条頼経が成人になる事を起草した。それは承久三年（一二三二）四月二十日の「末代の道理」が顕現していく治世への回帰を切願したからであった。⁽⁷⁾

建保四年（一二三二）正月の太子の靈告符台への機運は九条家に熟していく時局のもとで、末代の道理の枢軸に据えられた当人の良経の嫡男である道家は我が日録の『玉藻』承久二年（一二三〇）五月二十三日の条で、

廿三日、天晴、今晚女房見最吉夢、博陸有事、予可昇大位趣也、仰可信之、則念誦之、朝祈請八幡春日北野并三宝御前事、

と記載した。波線の事象は、前掲した『愚管抄』皇帝年代記の仲恭天皇紀の波線部「受禪同日為攝政」と別帖の土御門天皇の条の施線部「春日大明神モ八幡大菩薩モカク、皇子誕生シテ世モ治マリ、」と全く同一の事象を刻んだことになる。翌年の承久三年（二二二）三月二十日には末代の道理が顕現した。皇帝年代記に仲恭天皇紀を据え、そのなかで「道理必然」の言辞を嵌入して仏王法相依の道理・「冥顯二法」の道理に則りながら、慈円は史論『愚管抄』を成立させた。⁸⁾

承久三年（二二二）五月十四日に承久の乱が勃発する。そのため『愚管抄』の末代の道理の一部が通じない時局に陥ったものの、十年の歳月が経過したあとに九条道家の娘の樽子から生誕した親王が貞永元年（二二三）十月十四日に即位する。四条天皇であつて、道家は外祖父であるから摂政に就く。前掲した史論の「摂政之還補」の事象が顕現し、文暦二年（二二六）三月十二日に道家が独撰した『新勅撰和歌集』の最終的成立の精撰本を道家に進上する。大叔父の慈円の太子信仰を体现させていった道家は、『愚管抄』を熟読している。⁹⁾そこで嘉禎三年（二三七）頃から仁治元年（二四〇）頃にかけて、すでに慈円圏に参画していた学才・文才のある人材をも呼集して道家は、法性寺に慈円周辺圏を組織して延慶本『平家物語』の祖本の延長線上に位置付けられる『治承物語』を六巻本に再編するのである。¹⁰⁾その慈円周辺圏にも道家が参画していく。¹¹⁾

『平家物語』巻第九すなわち延慶本の「第五本」(全三十二章段)では、その最初の章段では、寿永三年（二一八四）正月一日の恒例の行事が満足に行われなかったことをいい、宇治川合戦から以降の源氏軍による追い上げを描き、二月七日の一ノ谷の戦いで源義経が率いる軍勢によって平家側の敗退の模様を押し出していく。悲惨な種々相を取り上げていくうちに、源氏勢の佐々木盛綱の一軍に包囲されて敗死した一人に平通盛もいた。その末尾には、

宮太瀧口時員ト云侍、三位ノ跡ヲ追テ参リケレドモ追ツカズ。三位被レ打給テ後、追付タリケレドモ頭ハナ

シ。ムクロヲミルニ、モヘギニヲヒノ鎧ノ引合セニ、秘藏シテ持給タリケル笛ヲ指レタリ。此笛ヲ取テ三位ノ御馬ノハナレテ有ケル取テ乗り、泣々馳返リケリ。
(二七)「越前三位通盛被打給事」

侍の宮太瀧口時員が通盛の秘藏していた笛を見つけたとあるのは、延慶本の独自異文である。通盛の風雅な平家の公達の側面が添えられており、すでに象られていた熊谷直実が討った敦盛の「鎧ノ引合ニ指レタリ。此筆策ヲバ月影トゾ付ラレタリケル。」(二五・敦盛被打給事)と同趣向が介在しているよう。その後、通盛戦死の報を知った「妾」でもあつた小宰相は悲嘆して月明かりの海に入水自死してしまつたと描かれていく章段が「通盛北方ニ合初ル事付同北方ノ身投給事」(三〇)なのである。本章段の小宰相をめぐる物語を本稿では「小宰相の哀話」と仮称して吟味したい。その小宰相の入水自死の章段のあとをうけて「平氏頸共大路ヲ被渡事」(三二)の章段があり、維盛の安否を気遣う北方の歌「イツクトモシラヌナギサノモシラグサカキクアトヲカタミトハミヨ」を添えた。最後の章段「惟盛ノ北方平家ノ頸見セニ遣ル事」(三三)を配して「平家物語第五本 十二卷之内」との言辞を以て括っている。物語全体からは平家一門の末路へ大きく比重をかけているのが全三十二章段を包括している「第五本」であつた。屋代本の巻第九に相当する。延慶本では「右大臣頼朝果報目出事」(第六末・三九)であり、本章段の直後には「平家物語第六末」の言辞が付記され、延慶本の「第一本」の「平家先祖之事」(一)よりの全章段は括られている。延慶本の祖本は慈円周辺圏で再編された六巻本『治承物語』の内実が「平家の興亡の物語」であるからには、小宰相の哀話は、確かに「興亡」の「亡」を典型的に充溢させた印象深い物語となつている。

本稿は延慶本の「通盛北方ニ合初ル事付同北方ノ身投給事」(三七)の章段を中心にしながら、仮称した小宰相の哀話の潤色には定家の手が入つていたことを探ろうとするものである。

(一)『治承物語』と六巻本『治承物語』

延慶本の小宰相を象つている最初は、

越前通盛ノ北方ハ、屋島ノ大臣殿ノ御娘也。御年十二ニゾ成給ケル。八条女院養進テ、通盛婿ニ取セ給タリケレドモ、未ダ少クオワシケレバ、近付給事モナカリケリ。

頭刑部卿憲方ノ御娘、上西門院ノ御所ニ小宰相殿ノ局トテオワハシケリ。貌形人ニ勝レテ心ニ情深、天下第一ノ美人ノ聞オワシケレバ、見人聞人、哀ト思ワヌハカリケリ。越前三位其時ハ中宮亮トイワレキ。此小宰相ノ局ノ少クオワセシ時ヨリ、一御所ニスミナガラ、哀ミマホシク思給ケレドモ、サモ無テ過給ケルホドニ、一年上西門院所々ノ名所ノ花御覽ゼラレケルニ、小宰相殿モ參給ヒ、中宮亮モ供奉セラレケリ。

(五本・三〇「通盛北方合初ル事 付同北方ノ身投給事」)

平宗盛の娘が正妻であったものあまりにも幼少すぎて親愛の情がわかず、そのため小宰相へ思いを寄せていく通盛を描き出す。上西門院統子（鳥羽院の第二皇女、後白河院の母儀に準じて皇后）の行啓に随うのを通盛が見初め、乳母の六条局を介して恋文を送り続けるが、小宰相の方は「三年マデ玉草数ノミツモリケレドモ、取モ入給ハズ」の情況がつづくのであった。そして、

「三年ノ思ニタヘズシテ、今ハ思切り、世ヲ遁テ高野、粉河コモルベキ」ナムド細ニ文ヲカキ給テ、(中略) 青侍ヲ以テ御文ヲ車ノ内ヘナゲ入サセテ、使ハカヘリニケリ。(中略) 袴ノ腰ニ挾^{さしはさま}テ、御車ヨリ下給ニケリ。(中略) ヤガテ御前ヘ參リ給テ、ナニトナク被^{まか}遊ケルホドニ、此文ヲ落シ給テケリ。女院ノ御目ニシモ御覽ジ出テ、統子のとりなしで通盛と小宰相とは結ばれた。その後、父母等とも別れて一ノ谷から屋島へ至る瀬戸内海の場合へ及ばせていく。そこでの通盛との関係を「カクテナレソメ給テ、年来ニモナリニケレバ、互ニ御志浅カラズ被^{まか}思タリケレバ、(中略) 小宰相殿ハ妾ニテオハシケレバ、一舟ニハ住給ワズ、別ノ御舟ニヲ奉テ、時々通給テ、三年方間、波ノ上ニ浮ビ給ケルコソ哀ナレ。」とした。圈点にあるように「妾」として描く。『治承物語』を遺存している四部合戦状本（屋代本は巻第九が欠巻、そのため四部合戦状本を引用）では「妾」とはせず、

我が船に具されんを憚り、侍の船に宿し奉りて、時々奇ひたまひけり。

通盛自身の判断で小宰相を侍に託していたとあった。要するに六巻本『治承物語』は『治承物語』よりも恵まれ

ていない境遇にあることを押しだす。小宰相の悲哀の情がより濃厚になっている延慶本は、小宰相の入水自死していく場面にも、

サルホドニ、臚ニ清メル月影モ雲井ニ傾キ、カスメル空モ明ユケバ、「サテシモ有ベキ事ナラズ」トテ、故三位ノ鎧ノ一両残りタリケルヲ、浮モゾ上ルトテヲシ巻テ、又海へ返シ入テケリ。乳母子ノ女房ツゞキテ飛入ラムトシケルヲ、人集テ取留メケレバ、船底ニ臥シマロビテ、ヨメキ叫事ナノメナラズ。悲ノ余リニ自らカミヲ切ヲトシテケレバ、門脇中納言ノ子息ニ中納言律師忠快トテオハシケルガ剃テ、戒持セラレテケリ。と描くのだが、四部合戦状本では、

御乳母の女房は喚き叫び、(中略)此の女房も「後れじ」と飛び入りけるを、人多くして取り留めけり。自ら髪を銜み落しければ、忠快とて、門脇中納言の子息にて御しけるが、髪を剃りて戒を持たせけり。

となつていた。四部合戦状本は波線部のように「御乳母」であつた。圈点を付したように延慶本では「乳母子」に変更している。両本が相違しているのは、文飾から看過できない。本章段より十八章段前に、戦意を喪失して凡愚となりはてた木曾義仲が自害を決断しようとしたのを「木曾ハ(中略)乳母子ノ今井・木曾殿ニハ乳母子」等と繰り返されている今井兼平は、

今井申ケルハ、「君ハ松ノ中へ入セ給へ。兼平ハ此敵ニ打向テ、シナバシニ、シナズハ返リ参ラム。兼平方行へヨ御覽ジハテ、ニ、御自害セサセ給へ」トゾ申ケル。木曾宣ヒケルハ、「都ニテ打死スベカリツルニ、爰マデキツルハ、汝ト一所ニテ死ムト思テナリ。……」
(五本・九「義仲都落ル事 付義仲被討事」)

と両人の最期を描いていた。史実からは傍証できない。幼少からともに育つた境涯への思い入れが慈円周辺圏の文事では介在しているであろう。小宰相の哀話と類同しており、延慶本では「乳母子」へ変更したのと同一の趣向であつた。

『治承物語』より六卷本『治承物語』の方が、悲哀の感情が濃厚になっているのは確かである。

(二) 上西門院統子から忠快そして定家へ

『愚管抄』別帖の後鳥羽天皇の条で、小宰相と通盛との仲をとりもつた上西門院統子を、

同三年三月十三日二法皇ハ崩御アル。(中略) 大方コノ法皇ハ男ニテヲハシマシ、時モ、袈裟タテマツリテ護摩ナドサヘヲコナハセ給テ、御出家ノ後ハイヨク御行ニテノミアリケリ。法華経ノ部数ナド、数万部ノ内二百部ナドニモヲヨビケリ。ツネハ舞・猿樂ヲコノミ、セサセツ、ソ御覽ジケル。御イモウトノ上西門院モ持經者ニテ、イマスコシハヤクヨマセ給ケレバ。ツネハ讀アイマイラセンナド仰ラレケリ。

(巻六——二七八ページ)

と把握し、出家後の後白河院の篤い信仰心と『法華経』書写の善行を怠らなかつたことに併せて、施線部で舞や猿樂等の「あそび心」に及ばせ回顧しながら、二重施線部で上西門院統子の方が読経では同母弟の後白河院よりはやかたつたと慈円は評している。この一節は別所の西山に組織された慈円圏から留意せねばならない。「あそび心」は慈円圏の文事の基幹と相即するからである。すでに後白河天皇の条にも、

四宮ニテ後白河院、待賢門院ノ御ハラニ、新院崇徳ニ同宿シテヲハシマシケルガ、イタクサタマシク御アソビナドアリトテ、

(巻四——二二六ページ)

「あそび心」を取り上げた。他方、信仰心についても当天皇の条に、

サテ後白河院ハ、佛法ノ御行ヒコトニ叡慮ニ入タル方ヲハシマシテ、御位ノ程、大内ノ仁寿殿ニテ、懺法行ヒナドセサセ給ヒケリ。

(巻四——二二五ページ)

と讃えている。さらに当天皇の息子の二条天皇の条に及ばせて、

サテ後白河院ハ多年ノ御宿願ニテ、千手観音千體ノ御堂ヲツクラント思召ケルヲバ、清盛奉リテ備前國ニテツクリテマイラセケレバ、長寛二年十二月十七日ニ供養アリケルニ、

(巻五——二二九ページ)

と繰り返している。後白河天皇の条で平治の乱の原因から乱そのものを詳述していく一節に、

義朝・清盛トテナラビタルニ、信西ガ子ニ是憲トテ信乃入道トテ、西山吉峰ノ往生院ニテ最後十念成就シテ決定往生シタリト世ニ云聖ノアリシガ、男ニテサカリノ折フシニシアリシヲサ、ヘテ、「ムコニトラン」ト義朝ガ云ケルヲ、「我子ハ学生ナリ。汝ガムコニアタハズ」ト云アラキヤウナル返事ヲシテキカザリケル程ニ、ヤガテ程ナク當時ノ妻ノキノ二位方腹ナルシゲノリヲ清盛ガムコニナシテケルナリ。コヽニハイカデカソノ意趣コモラザラン。(中略)カ、リケル程ニ平治元年十二月九日夜、三條鳥丸ノ内裏、院御所ニテアリケルニ、信西子ドモグシテツネニ候ケルヲ押コメテ、皆ウチコロサントシタクシテ、御所ヲマキテ火ヲカケテケリ。サテ中門ニ御車ヲヨセテ、師仲源中納言同心ノ者ニテ、御車ヨセタリケレバ、院ト上西門院ト二所ノセマイラセタリケルニ、信西ガ妻成範ガ母ノ紀ノ二位ハ、セイチイサキ女房ニテアリケルガ、上西門院ノ御ゾノスソニカクレテ御車ニノリニケルヲ、サトル人ナカリケリ。上西門院ハ待賢門院ノ一ツ御腹ニテ、母后ノヨシトテ立后モアリケルトカヤ。

(卷五——一三七〜二八ページ)

施線部で後白河院と上西門院と同一の車に乗せ、信西の妻は上西門院の衣の裾に隠れていたもので気付かれずに脱出できたとし、平治の乱の前哨戦を叙述した。特に留意したいのは二重施線部なのである。慈円が「あそび心」から『治承物語』を創出させた西山の往生院そのものが捉えられている。当該の文章の二重施線部から、慈円圏で創出させてきている『治承物語』を『愚管抄』に取用していた明徴となる。^[12]

筆者は『治承物語』を遺存している屋代本の建礼門院徳子の往生をめぐる物語を論じて、

慈円の愛弟子に忠快がいる。平教盛の子で壇ノ浦で捕虜となり都に送還後、伊豆に配流されるが赦された後には比叡山に居り、文治五年(一一八九)十月に大原で「九品往生密印明」などを書写した事実があつて、しかも承久三年(一二三二)には慈円が閲歴した同じ首楞嚴三昧院検校の職にあつた。^[13]

として、慈円に随伴した宮中の台密秘法を修していたとの見解を披歴した次第である。伊豆の小河郷に文治元年(一一八五)から同五年までの四年間、忠快は配流されていたわけだが、『玉葉和歌集』(巻一八・雑歌五)には、

ことありて伊豆国にながされ侍りけるを、おそくとひける人に申しつかはしける 法印忠快

身のうきか人のつらきかさりともおもふ日数をとはで過ぎぬる

(二五七二)

との歌を詠じおり、歌の心得もあつた。頼朝の監視下に置かれていた流人であつたものの、往時の流人として自身の境涯そのものをも思い遣つて目を掛けた頼朝は、忠快を建久六年(一九五)の上洛に伴わせる。『新古今和歌集』(巻第一八・雑歌下)に、

前大僧正慈円、文にては思ふほどのことも

申し尽くし難きよし申し遣はして侍りける返

事に

前右大将頼朝

陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ書き尽くしてよ壺の石ぶみ

(二七八五)

という歌があり、『源平盛衰記』(巻第四十六「南都御幸大佛開眼時忠流罪忠快免さるゝ事」)のなかに忠快が流罪を免除されて帰洛する一節に、

二位殿宣ひけるは、都に帰り上り給ふべきか、鎌倉におはせられよかし、縦ひ何所の御座しまし候ふとも、

頼朝が生きたら程は如何にも粗略ある可からず聞えければ、律師は、かゝる浮者に成りぬれば、いづくにも待るべけれども、花洛の東山なる一人の老母候ふが、自らが外に憑む方なく候へは、罷り上りたく存じ候、

とある。この場面と頼朝の歌に着目した安齋貢は「慈円と忠快は相当早い時期から交流(中略)頼朝と慈円を繋いだ人物であつたと考えられよう。」として、

頼朝の監視下にあつた流人、慈円の弟子といつた二人との関係に加えて共通する接点として忠快が和歌を詠んでいるということが考えられる。歌人である忠快の存在が頼朝と慈円の和歌の贈答において、そのきつかけに成りうる可能性も十分に考えられるのである。(中略)『源平盛衰記』の作者が、頼朝の贈答相手を慈円から忠快に変え、『新古今集』の和歌を二句と三句を変化させ引いてきたことは、明らかに認められる。

と論じた。^[1]『平家物語』初期生成期からかなり後年に成立している『源平盛衰記』であるから、慈円圏の文事と

視座を異にする。だが嘉応二年より十年以前の応保二年（二六二）に生誕し、源平の争乱を实見して、しかも『明月記』嘉祿三年（二二七）三月十八日条で、定家は、

横河の長吏忠快法印、一昨日早世と云々。門徒鬪諍の張本なり。病を受けて七ケ日、事の躰、時行かと云々。冥罰か。当初、甲子を同じくする由之を聞く。旧遊の零落悲しむべし。

と刻んだ。慈円が寂した二年後、慈円周辺圏が九条道家の主導する慈円周辺圏の文事がなされていく十年以前に当時としては六十八歳の高齢で逝去した忠快であるにもかかわらず、圏点を付したように「早世」と惜しみ、しかも施線部の「旧遊」の言辞を嵌入しているのは看過できない。慈円周辺圏で『治承物語』が六巻本に再編された後の仁治二年（二四二）、八十歳で寂した希代の歌人にして古典籍書写した定家であった。このことを顧慮すれば、慈円・頼朝・忠快と関連させる営為もあり得たと憶測されよう。

『源平盛衰記』の一節は忠快在世時の言行をそのまま遺存しており、永年にわたる定家との親交とも重なる。とすれば小宰相の哀話への定家が潤色していた証憑の一つになるのではなからうか。

（三）『建礼門院右京大夫集』を受容した『新勅撰和歌集』

平徳子は承安二年（一一七二）に高倉天皇の中宮になった。その頃から治承二年（一一七八）頃まで徳子に宮仕えした能書家の藤原伊行の息女である右京大夫は、当時の栄華を誇っていた平家一門の人々との贈答歌をはじめとして一門没落後の模様を、平重盛の次男の資盛への思慕の情を中軸しながら綴っていた。『建礼門院右京大夫集』（以下、右京大夫集と略称）である。壇ノ浦の海戦で資盛が敗死した報を知って耐え難い悲しみが充溢している部分は、小宰相の哀話も通盛の戦死を知って悲嘆している場面とほぼ照応しているように思われる。

右京大夫集の跋文に、

老ののち、民部卿定家の、歌をあつむることありとて、「書きおきたる物や」とたづねられたるだにも、人

かずに思ひ出でていはれたるなさけ、ありがたくおぼゆるに、

定家から「書きおきたる物」の提出を求められた。そこで右京大夫集の二首が後述するように採られることになった。貞永元年（二二三三）六月十三日、定家は参内して勅撰集編纂の下令をうけて、『新勅撰和歌集』を企図したからであった。

右京大夫集のなかで、

治承などの頃なりしにや、豊の明りの頃、上西門院女房、物見に車二つばかりにてまゐられたりし。
とりどりに見えし中に、小宰相殿といひし人の、びんひたひのかかりまでことに目とまりしを、と
しごろ心かけたていひける人の、通盛の朝臣にとられたりてなげくと聞きし。げに思ふもことわり
とおぼえしかば、その人のもとへ

さこそげに君なげくらめ心そめし山のみぢを人に折られて

(二六四)

かへし

なにかげに人の折りけるもみぢ葉をこころうつして思ひそめけむ

(二六五)

など申ししをりは、ただだごとこそ思ひしを、それゆゑ底の藻屑とまでなりしを、あはれのた
めしなさは、よそにてなげきし人に折られなましかば、さはあらざらまし。かへすがへすためしな
かりける契りの深さもいはむかたなし……

一門が廟堂で権勢を誇っていた治承年間の当時の新嘗祭（または大嘗祭）の翌日に行われることになっている豊樂殿での豊明節会に上西門院統子に仕える女房達が拝観のために物見車二両を連ねて、廟堂へ参入したとき、女房達の姿がとりどりに映えて美しかったと回想している。そのなかでも鬢のそぎ具合や額の髪のさがりように格別、眼を魅かれる小宰相がいて、言い寄った人がいた。が、通盛に取られてしまったので、その人の嘆いていることを聞き、右京大夫はその人のもとに「さぞかし本当にお嘆きでしょう。心に深くかけた山の紅葉のような美しいあの女を、人に手折られ」と詠じたので、圈点を付した「人」は「どうしてまあ、人が折ったあの女に心を

傾け、思いはじめてしまったのでしようか」と応じた。さらに施線では小宰相の入水自死した海上を描いていた。嘆いていた「人」と結ばれていたならばそうはならなかったのに、と。二重施線では小宰相と通盛との宿縁の深さは尋常ではないとの感慨を右京大夫は添えている。「人」を本井田重美は、

少なくとも彼女に相当親しい人で、しかも平家所縁でない、例えば泰通や親宗のような人をもつて擬する方が遙かに可能性が多いことを記すに止めよう。

と推測している^{〔15〕}。施線にあるように藤原泰通（一一四七〜一二三〇）をも「人」に擬したのは慈円圏と慈円周辺圏から興味深い（「結びにかえて」で後述するように、泰通の父である泰重の姉妹の一人が勸修家の長隆と結婚、その間に顕時と叡空とが生誕した。顕時の孫が慈円圏に参画した行長。叡空の法脈に西山義の祖である證空がいる。慈円周辺圏にも参画した證空に師事していく宇都宮入道運生の娘と余情妖艶の新風を確立した定家の嫡子である為家が結婚する。為家の嫡男の為氏が定家の御子左家を継承していく二条家の祖なのである。それは以下のような理由があるからである。

延慶本には泰通が頻出してゐる。高倉院崩御追悼の話群の一つとして院の生母である建春門院滋子の死を悼んで、高倉中将泰通朝臣参テ、已ニ御衣召替ケルニ、御帯アテマヒラセケレドモ、トミニムスピヤラセ給ワズ。御後ヨリ結マヒラセケルニ、アタ、カナル御涙ノ手ニカ、リタリケルニ、泰通朝臣ラレ^{（ウツク）}不^レ堪シテ涙ヲ流シ給ケリ。是ヲ見奉リケル公卿殿上人、各涙ヲ被^レ流ケリ。
（三本・四「青井ト云女内へ被召事付新院民ヲウレミ給事」）

高倉院が流した涙を手を受け、ともに落涙したと描かれている。官位は寿永二年（一一八三）に参議従三位、壇ノ浦の海戦後に三種の神器のうちの二種が都入りした元暦二年（一一八五）四月二十四日に、

廿四日、内侍所、神爾、鳥羽二着セ給タリケレバ、勘解由小路中納言経房、高倉宰相中将泰通、……

（六本・一八「内侍所神爾官庁入御事」）

立ち会っているとも象つている。文治二年（一一八六）には権中納言、この年に九条家に二十五歳の定家は出仕し、『一見浦首』で三夕の歌として有名な、

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦のとまやの秋の夕暮

（一三五）

を詠じており、廟堂で時めいている四十歳の泰通を間接ながら知ることにもなっていたであろう。泰通が寂したのは承元四年（二二〇）九月三十日であったが、その三ヶ月後の十二月十七日に内蔵頭になった定家は、同年頃から始発する慈円園にも参画していくのであった。

右京大夫集の跋文に、

……『いずれの名を』とか思ふ」とはれたる、思ひやりのいみじうおぼえて、なほただ、へだてはてにし昔のことの忘れがたければ、「その世のままに」など申すとて

言の葉のもし世に散らばしのばしき昔の名こそとめまほしけれ

(三五八)

かへし

民部卿

おなじくは心とめけるいにしへのその名をさらに世に残さなむ

(三五九)

とありしなむ、うれしくおぼえし

と記されている。『新勅撰和歌集』編纂のための歌を定家から求められ、建礼門院徳子に宮仕えしていた女房時代の召名と後鳥羽院時代の召名とどちらの名で載せますかと尋ねられた。もし世に残るならば、あの忘れがたい昔の名の方をとどめたいですと右京大夫は詠じた。定家は、それでは同じことなら、心に残る昔の名を世にしますと応じられたのを感謝したと回想している。しかも右京大夫集の奥書には、

本に云く

建礼門院右京大夫集なり。

この本自筆なりけるを、

七条院大納言、さがりがたき

ゆかりにて、このそうしを見

せられたりけるを、写され

たるとなむ。

承明門院小宰相本を以つて

正元二年二月二日書写し畢んぬ

施線のように七条院大納言すなわち藤原実綱の女が自筆本を書写したとみえる。実綱は後白河院の近臣にして正三位・権中納言であつたが治承三年（一一七九）十一月の清盛のクーデターで解官、翌年に急死した。母は高倉天皇に仕えた参河内侍であつて、右京大夫と親しかつた。¹⁶⁾奥書書写の年月日は、嘉禎三年（一一三三）頃から仁治元年（一一四〇）頃にかけて組織された慈円周辺圏の時期から二十年後であつた。かなり早い頃から右京大夫集の祖本が受容されていったことになるはずである。

『新勅撰和歌集』には、既述したように右京大夫集の二首を採っている。その一首とは、

この人もよしなしごとをいひて、「草のゆかりをなにかに思ひはなつ、ただおなじことと思へ」と、

つねにいはいはれしかば

濡れそめし袖だにあるをおなじ野の露をばさのみいかがわくべき

（二九六）

おほかたは、にくからずいひかはして、「果てまでもかやうにだにあらむ」といはれしかば、

忘れじの契りたがわぬ世なりせば頼みやせまし君がひとこと

（二九七）

贈答歌の和した方の一九七番歌であつた。それを定家は「題しらず」として、

建礼門院右京大夫

わすれじのちぎりたがわぬ世なりせばたのみやせましきみがひとこと

（八四二）

としたのである。さらに、もう一首は右京大夫集の、

里なりし女房の、藤壺の御前の紅葉ゆかしきよし申したりしを、散りすぎにしかば、むすびたる紅

葉をつかはす枝に書きてつく

ふく風も枝にのどけき御代なれば散らぬ紅葉のいろこそみれ

（二二）

であつた。それを『新勅撰和歌集』に、

高倉院御時、ふぢつぼのみぢゆかしきえよし申けるひとに、むすびたるのみぢつかはしける

建礼門院右京大夫

ふくげかも枝にのどけみよなればちらぬもみぢのいろこそ見れ (二〇九八)

詞書を変更して採り入れたのである。この詞書の異同を窺いながら慈円圏で創出された『治承物語』が慈円周辺圏で六巻本に『治承物語』が再編されていく前提を窺っている。

まず右京大夫集の一九七番歌では、平家一門が栄耀栄華をきわめていた往時に「この人」すなわち平重衡が冗談を言い、「恋人(資盛)に縁のある私(資盛の叔父が重衡)をどうして思い捨てるのですか、資盛と同じように思慕しなさい」と何度も言ったとしていた。「心から消えない資盛」の追憶にふけりながら、華やかに振る舞っていた重衡を浮上させている。

寿永三年(一一八四)二月十四日に一ノ谷の戦いで重衡が捕虜となったことを延慶本では、

二月十四日、本三位中将重衡ヲバ六条ヲ東へ被_レ渡サケリ。上下万人是ヲ見テ、「何ナル罪ノ報ゾヤ。哀レ、此人ハ入道殿ニモ二位殿ニモオボエノ子ニテオワセシカバ、一家ノ君達モ重キ人ニ思奉リシ物ヲ。院へモ内へモ参イ給ヌレバ、老タルモ若キモトコロヲオキ、詞ヲ係奉リキ。口ヲカシキ事ナド云置キ給テ、人ニモ忍バレ給シ物ヲ。南都ヲ滅シ給ヌル罪ノニヤ」トゾ申シアヘリケル。(五末・一「重衡卿大路ヲ被渡事」)

二重施線は、『愚管抄』別帖の安德天皇の条で「猶十二月廿八日二遂二南都へヨセテ焼払ヒテキ。ソノ大將軍ハ三位中将重衡也。アサマシトモ事モヲ口カ也。」(巻五——二五―ページ)とあつて、平家の嫡流の重衡が指示して東大寺・興福寺等が焼亡したと指弾しているのと一致する。廟堂に進出した清盛をはじめとして平家一門の横暴を極める治世すなわち王法の危機に瀕した治世と南都の寺院の焼亡すなわち仏法の動揺とを直視しながら慈円は把握したのであつた。要するに『愚管抄』の基底に据えられている仏法王法相依の道理に則つて描いている。他方では、延慶本の施線の「口ヲカシキ事ナド云置キ給テ」は右京大夫が描いた重衡と同一の視座をはらめてもいる。そこに『治承物語』を組み込んでいる『愚管抄』の文章の特色が看取される。要するに慈円圏・慈円周辺圏との

文事から留意せねばならない。重衡は清盛をはじめ平家一門の人々から信任されており、南都焼亡から五年後の寿永三年（一一八四）三月十日に頼朝の申し出によつて重衡は鎌倉へ下向する。延慶本では、次のようになってゐる。その途中、池田宿で長者の娘と、

彼宿ノ長者娘ニ、侍従ト云ヘル遊君アリ。中將ノ御殿居ニ参タリケルガ、暁帰ルトテ、殊ニ心俊タル女ナレバ、カクゾ申テ出ニケル。

東路ヤ半畝ノ小屋ノイブセサニ如何ニ古郷恋シカルラン

中將ノ返事、

古里モ恋シクモナシ旅ノ空イツクモ終ノ棲ナラネバ

（五末・八「重衡卿関東へ下給事」）

贈答歌を交わし、さらに湯浴みを許され、頼朝に仕える千手前の饗応をうけて朗詠する。そのことを、

……此殿ヲバ牡丹ノ花ニ例テコソ候シカトゾ申ケル。（中略）「初ハ五常樂、次ニ皇響ノ急ニテ候シガ、後ニハ廻骨ト云樂ニテ候」ト申。広元是聞テ、「彼廻骨ヲバ文字ニハ、カベネヲ廻スト書テ候。大国ニハ葬送之時、必ズ用ル樂也。而ニ中將今生ノ榮花尽テ、只今被レ誅給ナムズル事ヲ思給テ、彼異朝ノ例ヲ尋テ、葬送ノ樂ヲ彈レケルコソ哀ナレ」ト申ケレバ、左殿ヲ始奉テ、聞人涙ヲ流シケル。（五末・九「重衡卿千手前ト酒盛事」）

とあつて、そこに居合わせた大江広元は牡丹の花に譬えて重衡の雅を賞賛し、重衡の朗詠した曲目の故事と廻骨の樂をめぐつて由来を説いたので、頼朝をはじめとして侍している家来達が落涙したと見事に描く。『治承物語』を遺存している屋代本では、

弓矢取ル身ノ、敵ノ手ニ補レテ滅サル、事、昔ヨリ皆有事也。重衡一人ニ限ラネハ、今更可レ恥ニハアラネトモ、先世ノ宿業コソ口惜ク候へ。只芳恩ニハ疾々可レ被レ刎レ首」ト計宣テ、其後ハ物ヲモ不レ宣。

（卷一〇「同重衡頼朝対面以後狩野介預事」）

と簡略であつた。『治承物語』が六巻本に再編されて「平家の興亡の物語」になつたからである。

右京大夫集の一一一番歌は、前掲したように「里なりし女房の……結たる紅葉をつかはす枝にかきてつく」で

あり、里に戻っている女房が、清涼殿の西北の藤壺の紅葉を見たいと文を届けてきたが、すでに散ってしまったので、枝につくりものの紅葉を結びつけていたとの詞書を、『新勅撰和歌集』では、

高倉院御時、ふぢつぼのみぢゆかしきえよし申けるひとに、むすびたるもみぢつかはしける

と変更している。定家は高倉天皇が在位した九年目の十四歳の安元元年（一七五）に侍従、十九歳で従五位下に昇進し、安元二年（一七六）、二十二歳の慈円は『初度百首』に「無常」の題で、

はかなくて過ぐるこの世を夢ぞとは覚めて後こそ思あわせむ (八二)

との歌が入っており、慈円より七歳若い定家は『初学百首 養和元年四月』に、

夢の内にそれとて見えし倂をこのよにいかで思あはせむ (六七)

六七番歌では夢にみた恋人の面影を現世でみたいと詠じる。明らかに慈円の八二番歌に倣って詠じたのであり、後年の慈円圏の参画をしていく道への第一歩を踏み出していく発端の意義を担った。右京大夫集の一一一番歌には、吹く風が枝を鳴らすこともなく、散ることが無く美しい紅葉を見ることがだとの意味であり、現今の治世は泰平を寿いでいる。それを定家は、詞書で「当天皇在位している治世で、藤壺の紅葉が見たいと申し入れた人に、造った紅葉を贈った」と切り替えている。前掲したように『愚管抄』別帖の高倉天皇の条で「……コノ平太相国入道ガムスメヲ入内セサセテ、ヤガテ同ジ二年二月十日立后、中宮トテアルニ（中略）皇子誕生思ヒノ如クアリテ、思フサマニ入道帝ノ外祖ニナリニケリ。」（巻五——二四三〜四四ページ）と慈円が評し、その直後に鹿ヶ谷事件の事象へ及ばせ、

コレニヨリヨリテ改元、治承トアリケリ。入道カヤウノ事ドモ行ヒチラシテ、 (巻五——二四六ページ)

王法の動揺へ展開させ、慈円圏で創出している『治承物語』を取用して源頼朝が拳兵から源平の争乱を詳述していった経緯を念頭に置いて『新勅撰和歌集』の一〇九八番歌の詞書にしたと想定されよう。

右京大夫集から採った今、一首は、

里なりし女房の、藤壺の御前のもみぢゆかしきよし申たりを、散りすぎにしかば、むすびたる

紅葉をつかはす枝に書いてつく。

ふく風も枝にのどけき御代なれば散らぬ紅葉のいろこそみれ

(一一一)

であった。それを『新勅撰和歌集』の一〇九八番歌の詞書では、

高倉院御時、ふちつぼのみぢゆかしきえよし申けるひとに、むすびたるもみぢをつかはしける

「高倉院御時」に造花の紅葉を贈ったと変更した。その定家の意図とは、以下のような理由からであろう。すなわち、右京大夫は安元二年から治承元年（一一七七）八月に改元された当時には資盛との交わりが始まっており、右京大夫集に、

小松のおとどの菊合をし給ひしに、人にかはりて

移しううるやどのあるじもこの花もともに老せぬ秋ぞかさねむ

(五六)

資盛の父の重盛が内大臣の地位にあった頃、菊合をした折にある人にかわつて、花もともども、不老長寿の秋を繰り返しますと詠じていた。さらには、

おなじおとどの、大臣の大将にてよろこび申しし給ひしに、おとうとの右大将、

御供し給へりし、いきほひゆゆしく見えしかば

いとどしくさきそふ花のこずゑかな三笠のやまに枝をつらねて

(五七)

重盛の弟である宗盛の供をして、平家一門が興隆している治世を咲き誇る花の梢に擬してもいる。右京大夫は二十四歳であった。定家は廟堂に出入りをしはじめている安元元年（一一七五）十四歳に侍従、十九歳で従五位下であったから、五七番歌と同じ思いにかられていたはずである。

『新勅撰和歌集』の一〇九八番歌の詞書の「高倉院御時、ふちつぼのみぢゆかしき……」とは、『愚管抄』別帖の高倉天皇の治世を叙述している慈円の視座で簡潔に書き換えた。要するに定家は平家一門が栄耀栄華を極めている廟堂内外の空間を概括したといえよう。

(四) 王朝文学の受容から「白」の色へ

後堀河天皇を下命者とする『新勅撰和歌集』を定家は独撰して、当天皇の第一皇子がわずか二歳で四条天皇として貞永元年（二二三三）十月四日に即位する。四条天皇の外祖父の藤原道家に精撰して仕上げた『新勅撰和歌集』を呈上したのは文暦二年（二二三五）三月十二日であった。執政の「臣」の立場にある道家は、嘉禎三年（二二三七）頃から慈田周辺圏を主導していく。ここでは、小宰相の哀話に描かれている瀬戸内海の空間に視点を据えて窺っている。

一ノ谷から屋島に渡る船のなかで、宮太瀧口時員から通盛の討死を聞き、悲嘆した小宰相は、付き添っている乳母子の女房に回顧談をする。そのなかに出撃していく通盛に懐妊したことを告げたところ、

……ナノメナラズ悦、『通盛スデニ卅二成ナムズルニ、未ダ子ト云者ノナカリツルニ、初テ子ト云者有ラム
 ズラム事ノウレシサヨ。アワレ、同ハ男子ニテアレカシ。サルニ付テモカクイツトナキ船ノ中、波上ノスマ
 ヒナレバ、身タトナラム時、通盛イカゞセムズラム』ト、只今有ムズルヤウニ歎給シ物ヲ。ハカナカリケル
 カネ事カナ。軍イツモノ事ナレバ、ソレヲカギリ最後トハ思ワズアリシ。六日ノ暁ヲ限トシリセバ、後ノ世
 ニトモ契テマシ。誠ヤラム、女ハ身タトナル時、十二九八死ヌナレバ、カクテ恥ガマシキ目ヲ見テ、トモカ
 クナラム事モ口惜シ。

喜悅した通盛は男子の誕生を願っていたが、通盛の敗死してしまった今となれば空しいと小宰相は痛嘆し、施線部にあるように出産での危惧をも吐露した。さらに、

此ノ世ニナガラヘテモナニカハセム。(中略) 若サモ有ム時ハ、ワラワガ装束ヲバ、何ナラム僧ニモトラセテ、
 衣ニセサセテ、後生ヲモ問ヒ、無人ノ菩提ヲモ助給へ。書置タル文共ヲバ都ヘトツケ給ヘヨ」ナド、コシカ
 タ向末ノ事共マデカキクドキ宣ケレバ、

入水自死するので、自己の後世菩提の弔いと遺書を届けて欲しいと乳母子の女房に懇請した。そこで心強く身を

処して無事に子を産み、育てあげて通盛の形見として、それで飽き足らないならば、通盛の冥福を祈り、

イカナラム山寺ニモ閉籠ラセ給テ、閑二仏ノ御名ヲモ唱テ、故殿ノ御菩提ヲモ報マイラセテ、我御身ノ後生ヲモ助ラセ給ワムニ過タル善知識ハ争力候ベキ。

往生する善知識になっていくことを乳母子の女房は切願した。入水自死は無謀な行為であると条理をきわめて小宰相に諭す。そこで小宰相は、

…サマトニナグサメ申ケレバ、「懐妊ノ身トナリテハ、死ヲサル事遠カラズナド云ナレバ、カヤウニ浪ノ上ニテアカシクラセバ、思ガケヌ波風ニ逢テ、心ナラズ身ヲ徒ニナスタメシモ有ゾカシ。(中略)今ハナカク、二見ソメヘソメシ雲ノ上ノヨハノ契サヘクヤシクテ、彼ノ源氏ノ大将ノ朧月夜ノ内侍ノカミ、紅徽殿ノホソ殿モ、我身ノ上トオボユルゾ」トヒソカニ宣ケレバ、

海の荒波により身を失ってしまうこともあると抗弁、通盛との出会いを光源氏に対する朧月夜の内侍に自己を擬した。『源氏物語』「花宴」巻に、酔いの心地でたまたま戸口のひらいていた弘徽殿の細殿に光源氏は忍び入り、『新古今和歌集』(巻一・春上)に採られている宇多天皇頃の歌人の大江千里(罪を得て籠居、官人として不遇)の、

照りもせず曇りも果てぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき (四五)

下の句を誦している政敵の右大臣の息女が近づいてきたので光源氏は契った。そこで、

人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふけしきども、しげくまよへば、いとわりなくて、扇ばかりをしるしに取しかへて、出でたまひぬ。

女房たちが起きて騒がしくなり、そこで仕方なくそれぞれの扇を取り替えて逢瀬の形見とし、出て行った光源氏は、政敵の目をかわそうとして須磨・明石へ隠遁していくわけだが、朧月夜も立後の途が閉ざされてしまった。その危険な予感に満ちた巻を延慶本では引き合ひに出した。

久保田淳は「定家における『源氏物語』の受容は、全体的というよりは、若紫・花宴・須磨・明石・浮舟などの特定の巻々に限られる傾向が見出されるといえそうである。(中略)同時に破滅的な恋の場面での叙述や歌に愛

着を抱いていたらしいことも窺える。」と指摘していることに留意せねばならない。¹⁸⁾ 定家の『源氏物語』の受容は「桐壺」巻から「夢浮橋」巻までの全五十四巻の十分の一にも満たない。そのなかに「花宴」巻が挙げられているのは看過できない。施線部の「破滅的な恋の場面」との久保田の言説に顧慮したならば、小宰相の哀話を慈円周辺圏に参画した定家が文飾していったことを想定させる一因になるであろう。

延慶本の小宰相が入水自死していく場面には、

三位ノ筆ニテ書給タリケル猿衣ノ有ケルヲ取出シテ、アワレナル所ヲヨミテ、忍クニ念仏ヲ申給ケレバ、
「ゲニモ思延給ニコソ」ト心安ク覺テ、御ソバニ有ナガラ、チトマドロミタリケルヒマニ、ヤワラ舟ノハタ
ニ立給タリケレバ、(中略) 千尋ノ底へ入給ヌ。

通盛の書いた『狭衣物語』を読誦している小宰相を象つている。『明月記』承元元年(二二〇七)五月十六日の条に「狭衣の歌、書き進むべきの由、仰せ事有り(未の時)。」とあつて、後鳥羽院から『狭衣物語』の歌の抄出を命ぜられ、翌日の十七日の条では「狭衣の御点を給はり、之を書き進む。」とあるので歌に御点が付され、『狭衣物語』が届けられたので清書して再び後鳥羽院の許に進上している実相があつた。

小宰相の哀話は王朝物語の影響を承けている定家の文飾が明瞭になる。¹⁹⁾

円熟した五十代後半より最晩年の定家は物語・日記・古記録から『摩訶止観』等の仏典に及ぶ書写校勘に熱意を高めたことは周知のとおりであり、後述もしたい。そのなかに『土佐日記』自筆本を文暦二年(二二三五)五月十二日・十三日との両日で書写し終えて、奥書に「不堪感興自書写之昨今ニケ日終功」と定家は記載している。ところが、この文事そのものを我が日録である『明月記』に記載してはいない。このことに着目した松原輝美の論文『土佐日記私考』を具体的に紹介してみたい。本論文の「序章 定家有情」で、

……その書写本の「奥書」に書きつけた心勢いを何故、定家は、「明月記」のあの丹念極めた記事行間から消し去つたのであろうか。

としている。因みに圏点を付した「行間」は興趣に尽きない。「行間」は『愚管抄』の文章や慈円圏・慈円周辺

圈の鍵語になる言辭であるからである（「行間」そのものをめぐっては別途に考察。「第四章 亡児哀傷」では、

撰関家藤原氏への配慮から、この歌語りを引くに当つて（中略）貫之の強い氏族意識があつた（中略）韜晦のポーズをとらざるを得ない（中略）自らの悲しい性を傍観かきしているもう一人の貫之がいる。

として、紀貫之と主家の撰関家の九条家に供奉してきている定家と重ね、「終章 風狂の生」に及ばせ、

「口惜しさ」を書く貫之に、今見えて来るものは、その生涯の終わりを風狂の生に生き、そして「無用者の境涯」にこそ生きるべき己のすがたであつた筈である。

と論じて、さらには、

治承四年（一一八〇）から寛喜三年（一一三三）に至る五十余年にわたる「明月記」の膨大な記述の全量は、おぞましさの、その嗟嘆におのずから収斂していくかの観がある。

としながら、定家が『土佐日記』を書写した奥書で「紀氏 延長八年在土佐守、在国載五年六年之由、承平四年甲午、五年乙未年事歟 今年乙未歴三百一年紙不朽損其字又鮮明也」との識語を記載したからには、

文暦二年五月十二、十三日の「明月記」の文面から「土左日記」書写の記事を抹消し去つた定家のその行為は、その生涯の終わりに来て悔恨の一書を残さざるを得なかつた貫之への労りに出でた行為であつたのだと私は思う。

と推定し、論文の末尾の一文では、「任中納言の貞永元年（一一三三）のその年を最後に殆んど歌うことのなくなつた定家の、同じ境涯に生きた身としてこれは、散位の老歌人貫之に捧げられたひそかな挽歌であつたと読めないこともない。」^[20]とした。

松原の本論文の言説から、『土佐日記』に大へん触発されていた定家が浮上するであらう。

『土佐日記』は、承平四年（九三四）十二月二十一日から翌年の二月十六日日の帰京まで帰途の模様を虚構をまじえながら、波風にさまたげられて航路のはかどらぬもどかしさ等を、歌を配して描いた王朝文学の先駆の作品である。そのことを承平五年一月二十二日の、

今日、海荒げにて、磯に雪降り、波の花咲きけり。ある人のよめる、

波とのみひとつに聞けども色みれば雪と花とにまがひけるかな

施線部に象徴的に仕組んでいる。当該歌の下の方では「雪とも花ともまぎらわしい」と詠じている。雪の「白」の色をもとに花を擬した。「見立て」の修辞が介在している。この修辞を手掛かりに小宰相の哀話では「白」の色にはどのような意味を有するかを探っていきたい。

『土佐日記』は、平将門が東国で内乱をおこした承平・天慶の乱は廟堂をも震撼させ、藤原純友が瀬戸内海の手取と共謀して瀬戸内一帯を我がもの顔に荒らしている恐怖を「海を見て、国よりはじめて、海賊報いせむといふなることを思ふうへに、海にまた恐ろしければ、」（承平四年十二月二十一日）と描いた。おびえつつ航海を続けねばならなかった貫之の見解を風刺的に結構した作品である。延慶本では、源頼朝の拳兵から源平の衝突を前面へ押し出していく発端は、

朱雀院御時、承平年中二、平将門、下総国相馬郡二住シテ、八ヶ国ヲ押領シ、自ら平親王ト称資ジテ都へ打上ケリ。帝位ヲ傾奉ラムトスル謀反ノ聞ヘ有ケレバ、（中略）諸寺諸社ノ僧滝侶二仰テ、将門調伏ノ祈請有ケリ。

（二末・二二「昔シ将門ヲ被追討事」）

『将門記』を素材にして、平維盛の率いる軍勢と頼朝軍と対峙して、水鳥の羽を関の声と聞き誤り、笑いものになったと描いた。^[2]『明月記』治承四年（一一八〇）十一月七日の条に、

七日。天晴る。去る夜、維盛少将坂東より逃げ帰り、六波羅に入ると云々。客主の貌、已に相若かず。況んや亦疲足の兵、新騎の馬に当り難しと云々。入道相国、猶以て逆鱗と云々。

蓄えてきている豊かな古典籍類をもとに定家は趣向をこらしている。留意すべき施線部であつて、李陵の『答蘇武書』（『文選』卷第四十二）に、

单干臨陣、親自合围、客主之形、既不相如、步馬之勢、又甚懸絶

匈奴に包围された李陵らの軍勢が極めて不利な形勢であつたとの条りから、^{くだり}囲まれて敗北した維盛の様子を擬え

た。²²⁾
しかも、

……「漁舟ノ火ノ影ハ寒クシテ焼レ浪ヲ、
馭路ノ鈴ノ声ハ夜過レ山ヲ」ト云唐韻ヲ詠シタリケルガ、折カラ優二聞
ヘテ、民部卿涙ヲ流テソ行ケル。
(二末・二二「昔シ將門ヲ被追討事」)

漁火が浪間を焦がすように光り、山越えする馭路の馬の鈴音が遠ざかっていくとの美辞麗句は「秋宿臨江駅二
〔全唐詩〕卷六九二に所収に依拠している。前掲した『明月記』治承四年十一月七日条の施線部の「客主の貌、已
に相若かず」の定家の趣向と類同している。

維盛が一ノ谷の戦いの後、都にいる妻子のことが忘れられずに屋島で我が平家一門から離脱、熊野山中を彷徨
して熊野灘から那智沖で念仏を唱えながら入水往生した場面は、『平家物語』の屋代本・四部合戦状本をはじめ
として諸本にある。しかも熊野山中で妻子をしきりに思慕しながら徘徊している維盛の形象は、定家の『熊野道
之愚記』での幼児を抱いた盲女の痛々しい情景描写と同質なのであった。²³⁾

現在の神戸市灘区と垂水区との間にある南東斜面の一ノ谷で寿永三年(一一八四)二月二日に討死にした通盛
を知つて小宰相が懊悩して入水自死を遂げた海上の空間と同一の空間を描く『土佐日記』は、承平四年(九三四)
十二月二十二日は、

二十二日に、和泉の国までと、平かに願たつ。藤原のときぎね、船路なれど、馬のはなむけす。上中下酔ひ
あきて、いとあやしく、塩海のほとりにて、あざれあへり。

海上での危惧と饑別とを併記し、土佐の国府から室戸岬から通盛の討死にした一ノ谷も遠望できる鳴門を通過し
ていく航路を順次とりあげ、その八日後には瀬戸内海へと航行しはじめた。そのことを、

三十日、雨風吹かず。「海賊は夜あるきせぎなり」と聞きて、夜なかばかりに船を出だして、阿波の水門を
渡る。夜なかなれば、西東も見えず。男女、からく神仏を祈りて、この水門を渡りぬ。寅卯の時ばかりに、
沼島といふところをすぎて、多奈川といふところを渡る。

夜にも船を出して、淡路島の南方にある「沼島」から「多奈川」すなわち現在の大阪府南部の港へたどり着いた

のであった。この航路の途中は小宰相が入水する海上空間と確かに重なる。

建久四年（一九三）頃に九条良経が主催した「六百番歌合」に、

待恋

風つらきもとあらのこはぎ袖に見て更行夜（みゆ）はおもる白露

（八五八）

風が無情に吹き付けて、小萩に白露が吹き結ぶように、夜が更けていくにつれ、私の袖にも涙の白露が重く置いてしまったとの定家の歌が入っている。慈円の勸進による承久二年（二二二〇）春の「四季題百首」では、

我心ころやよひの後の月の名に白きかきねの花盛哉

（三三九一）

憂く辛く、垣根に満開の白い花、卯の花のように、愁いの花が咲き満ちていると定家は詠じていた。ともに「白」の色が哀愁をきわだたせている。この二首の「白」と『土佐日記』の「浪白く」・「白き浪」・「白浪」とは同じ趣向といえよう。定家は『土佐日記』を「本説」にして詠じていると証憑の一つになってくる。しかも『新古今和歌集』（巻十五・恋歌）に、女の心をもとにして、

白妙の袖の別れに露落ちて身にしむ色の秋風ぞ吹く

（一三三六）

悲しみの紅涙が白妙の袖にかかり、寂しい秋風が露も吹き落していくと詠じた定家の歌が採られており、「風物を点景として打伏してゐる女の姿態を白描のやうに浮び上がらせることにも成功」した歌であった。^[24] 本歌集には慈円の、

わが恋は松を時雨の染かねて真葛が原に風さわぐなり

（一〇三〇）

思慕している相手をなびかせることができずに、葛の葉が「白々と見せながら」風が騒いでいるように、恨みの心が騒いでいる、との歌も採られている。上の句の「松」には、当然ながら「待つ」のを意味をはらませ「待つ女」を浮かび上がらせた。定家の歌と類同するであろう。慈円圏・慈円周辺圏との関連をみていこう。

『明月記』文暦二年（二三三）五月二十七日条に、

嵯峨中院障子の色紙形、故に予に書くべき由、彼の入道懇切なり。

嫡男為家の妻の父である宇都宮入道蓮生から「小倉山荘色紙和歌」を求められた。三年後の嘉禎三年（二二三七）からの慈円周辺圏では、『愚管抄』を取用しながら「平家の興亡の物語」を内実とした六卷本『治承物語』では、「亡」の典型が小宰相の哀話であった。『百人一首』の「おほけなくうき世の民に覆ふかな我が立つ袖に墨染の袖」の慈円を批評した目崎徳衛は「氣宇壮大な述懐である。九条家に仕える定家は、慈円のそうした体制護持の使命感に満ちた風貌に畏敬して、この一首を採ったのであろう。」とし、定家をして慈円へ寄せる信任の大きさを当該歌から読み取っていた。⁽²⁵⁾

小宰相が入水自死した直後の場面は、

ヨリシモ月ハヲボロナリ、衣モ白シ、波モ白カリケレバ、シラミアキテ、シバシハ浮上リ給ヘドモ、ミワクル方モナカリケレバ、トミニモ取上奉ラズ。遙ニホドヘテトカクシテカツキ上奉タリケレドモ、此世ニテモナキ人ニ成給ニケリ。白キ袴ニ鍊緯ノ二衣引マトヒテ、髪ヨリ始テシヨクトシテ、

と描かれている。慈円圏でオマージュとして受容されていた『栄花物語』には、彰子が懐妊したので、

白き浮文の御衣をぞ奉りたる、御手習に添ひ臥させたまへり。御髪のコぼれかからせたまへるほどぞ、あさましうめでたう見たてまつらせたまふ。

（巻八「はつはな」・二七七）

白い上衣を着て手習いしていたので髪がたれかかっているのを父の道長が素晴らしいと思っていたという場面があることを添えておきたい。この典雅さに配意した斎藤慎一は、小宰相の哀話の施線部の「白キ袴ニ鍊緯ノ二衣引マトヒテ」をもとに「二衣に白き袴という一見簡略なる姿は、貴人の女房の装束として、尊貴・上臈の桂姿ということになるう。」として、「中世的な着装法ということになるうか。」と推測している。確かに、『明月記』寛喜元年（二二三九）十二月二十九日条に、

年始女房の装束調へ出し、昏黒の後に之を送ると云々。（中略）今一人色々の栢。各々唐綾の小袖を着すと云々。少年の時見聞せざる物なり。

現今の場合と少年期との違いを記している。確かに『明月記』寛喜三年（二二三二）八月十七日条の「終日、錦の

小袖を着す。・嘉禎元年（二二三五）六月十九日の条「冷気催し、錦の小袖を着す。」等と記されていることや、『愚管抄』別帖の二条天皇の条に「コノ内侍ドモハ小袖バカリキテ、カミワキトリテ出ニケリ。」（巻五——二二三三ページ・後鳥羽天皇の条に、

安徳天皇ノ御メノトナリシニムコトリタルガ、アネノ大夫三位ガ、（中略）只今死ナンズル身ニテ、ナクく小袖キカヘナドシテスギケルヲバ、
（巻五——二六七ページ）

壇ノ浦の海戦後に入水自死した安徳天皇の乳母が小袖に着替えて過ごしていたと慈円が叙述していることも配意したならば、斎藤が「庶民の一種の機能的作業衣ともいうべき小袖が、伝統的な貴族の服制の中に取り入れられ貴族の着衣法に一つの変化を促すに至ったのである。」として、

戦乱の中の小宰相の伝統的な女性としての哀傷、能登殿の武勇をきわだたせる装束にも中古の服制とは異なる新しい時代の風俗が影響を落しはじめている。

と指摘したのに左祖できよう。²⁶⁾慈円圏の『治承物語』より慈円周辺圏での六巻本『治承物語』の方が彫琢をきわめている。

有職故実や治世への認識そして王朝文学への造詣を深めた円熟しきった晩年の定家が、小宰相の哀話を潤色したと想定されよう。

小宰相の血脈と西山義の法脈そして定家へ——結びにかえて——

寿永三年（一一八四）二月七日に平通盛が討死、同月十三日に小宰相が入水自死したと六巻本『治承物語』を祖本としている延慶本『平家物語』では描かれた。養和元年（一一八二）四月の『初学百首』には、

釈教

うき世にはうれへての雲しげければ人の心に月ぞかくるゝ

寿量品

（八四）

無常

ながめてもさだめなき世のかなしきは時雨にくもるありあけの空

(八八)

水のうえに思なすこそはかなければがて消るをあわとみながら

(八九)

別

わかれても心へだつたたび衣いくへかさなる山ちなりとも

(九〇)

八四番歌に「月」、八八番歌に「さだめなき世」、八九番歌に「水のうえ」、九〇番歌では「わかれ」が取り込まれていた。通盛を思慕して入水自死する場面の素材と主題が出そろっている。二十歳の時の定家の歌である。小宰相の哀話の素材になる事象があったのは二十三歳であり、父の俊成の五条邸より出て外祖母の法性寺邸から廟堂へ出仕していた。^[27] 慈円周辺圏となつていく空間や廟堂で飛び交っている噂を分別できる年齢であつたからには、小宰相の哀話の素材に関連している何らかの情報を入りに定家自身も胸底に残したとも推測されよう。

『愚管抄』別帖の高倉天皇の条には、

關白嘉応二年十月廿一日高倉院御元服ノ定ニ參内スル道ニテ、武士等ヲマウケテ前駟ノ髻ヲ切テシナリ。コレニヨリテ御元服定ノビニキ。サル不思議有シカド世ニ沙汰モナシ。次ノ日ヨリ又松殿モ出仕ウチシテアラレケリ。コノフシギノ後ノチノ事共ノ始ニテアリケルニココソ。

(卷五——二四六〜四七ページ)

慈円圏で創出された『治承物語』に描かれている執政の「臣」の藤原基房と平家側の衝突をめぐる事象を施線のように「不思議」と慈円自身は評した。仏法王法相依の道理に則りながら、本物語の嘉応二年(一一七〇)の公武の衝突すなわち王法の混乱より、仏法が危殆に瀕した重衡の南都焼亡から源頼朝の平家征伐によって治世の安泰へむかう時局、すなわち王法と仏法とが静謐になるまでの顛末を叙述していく。^[28] 「不思議」には、安徳天皇の条で、頼朝を正面に据えた最初の一節の、

伊豆二ハ流刑ニ行ヒテケル也。物ノ始終ハ有レ興不思議ナリ。其時モカ、ル又打カヘシテ世ノヌシトナルベキ者也ケレバニヤ、頼盛ヲモフカクタノミタル氣色ニテ有ケルナリケリ。コノ頼朝、コノ宮ノ宣旨ト云物ヲ

モテ来リケルヲ見テ、「サレバヨ、コノ世ノ事ハサ思シモノヲ」トテ心ヲコリニケリ。

(巻五——二五一〜五二ページ)

『治承物語』が描いていた以仁王の令旨を受け取った頼朝の言行を「但コレハヒガ事ナリ。」(巻五——二五二ページ)として、実相は文覚が、

四年同ジ伊豆國ニテ朝夕ニ頼朝ニナレタリケル、ソノ文覚サカシキ事ドモヲ、仰モナケレドモ。上下ノ御ノ内ヲサグリツ、イ、イタリケルナリ。

(巻五——二五二ページ)

直接に旗揚げを廟堂と平家側の動向をもとに頼朝に教唆したと叙述している。この文章の構造から、後鳥羽天皇の条の、

……コノ九郎ソノ一ノ谷ヨリ打イリテ、平家ノ家ノ子東大寺ヤク大將軍重衡イケドリニシテ其外十人バカリソノ日打取テケリ。教盛中納言ノ子ノ通盛三位、忠度ナド云者ドモナリ。サテ船ニマドイノリテ宗盛又ヨチニケリ。其後ヤガテ寿永三年四月十六日ニ、

(巻五——二六三ページ)

の行間には小宰相の哀話が介在している。要するに慈円圏で創出された『治承物語』の描く通盛と小宰相との馴れ初めより瀬戸内海の屋島沖で小宰相が入水自死に至る顛末を描いた物語が右文の「……通盛三位、忠度ナド云者ドモナリ。」の文と「サテ船ニマドイノリテ宗盛又ヨチニケリ。」の文との間にふかぶかともっているわけなのである。

縁戚関係と法脈そして慈円圏の定家との〔相関図〕①をみてみよう。すなわち、

〔相関図〕①から、醍醐天皇の外祖父であつた高藤に始まる勸修寺流藤原氏（相関家の家司を輩出する家柄）の出自である為房（一〇四九〜一一二五）は執政の「臣」の藤原師実・師通二代の家司であつて、後三条・白河・堀河・鳥羽の四朝に仕えた。子孫の憲方と為隆の弟の顕隆の娘とが結婚して、この兩人のあいだに誕生したのが小宰相なのである。西山の往生院の二世院主である観性は為隆の娘と顕隆の息男の顕能とのあいだに誕生して、観性に師事した慈円は三世院主に就く。ここに法脈ができたわけである。高階重仲（一〇六九〜一二二〇）の女は顕隆の弟の長隆と結婚している。重仲は相関家の執政の「臣」となつた藤原師通・忠実父子に仕えた。その孫こそが小宰相と通盛との宿縁の綴つた右京大夫集の「小宰相殿といひし人の、びんひたひのかかりまでことに目とまりしを、としごろ心かけたていひける人の、通盛の朝臣にとられたりてなげくと聞きし。げに思ふもことわりとおぼえしかば、その人」へ一六四番歌を詠じ、「人」が一六五番歌を交わした。「人」を本井田重美が泰経に擬した。泰経は文治元年（一一八五）十二月に源義経の謀叛に関わつて解官され、伊豆国へ配流される。が、許されて後白河院の側近となり、建久二年（一一九二）正二位に昇進していく。また判然としてくることは、高階家の女と勸修寺流藤原氏の男とのあいだに叡空と顕時との二人の息男がいて、顕時の孫の行長が『徒然草』二二六段に「信濃前司行長」・「行長入道」とされる当人であつて、行長の大叔父の叡空が専修念仏を唱える法然房源空の師である。西山義の祖である證空（一一七七〜一二四七）は、法然房源空が建暦二年（一一二二）に寂すると、慈円と交わり始めて、西山の三代往生院の院主慈円から将来を嘱望された證空が四代目の院主となり、九条家や徳大寺家等の王法の中核にいる権門を背景にして、源空の教義にとどまらずに仏法王法相依の道理と齟齬しない天台教学を取り込んだ教義を宣揚していく。證空は西山義の開祖となつた。⁽²⁹⁾ 證空に師事した宇都宮入道蓮生は、我が女を定家の嫡子の為家を婿とし、兩人のあいだに生誕したのが為氏であり、為氏の子の為世（一二五〇〜一三三八）なのである。伝統美のある「平明」を尊び、余情のある歌を重視する二条家の宗匠として、兼好等に歌人を養成していくのは周知のとおりである。要するに定家は慈円團の文事を通じて蓮生の器量を知悉してより、定家と蓮生とは歩調をそろえていく。

承元四年（二二二〇）頃から建保七年（二二〇六）に至る期間に西山の空間に慈円圏が組織されれば、「相関図」①の勧修寺流藤原氏と高階家の血脈と法脈とに照らせば、小宰相の哀話が『治承物語』に描かれていくのに疑義をはさめないのではないか。『治承物語』を遺存しているのが現存の諸本では屋代本・四部合戦本であった。屋代本は小宰相の哀話を含む巻第九はすべて欠落している。そこで四部合戦本によって窺ってきたわけだが、同本には、海に浮かぶ船の中で、

念仏を小声に百返計り申して、「南無西方極樂教主、弥陀善逝、必ず一仏浄土へ迎へたまへ」とて、海へ入りたまひぬ。
（卷九「小宰相身投」）

「一仏」と小宰相は唱えたと象られていた。『治承物語』は、西山義の法然房源空の念仏往生を継承しつつ「方法論として伝統的な天台思想を基盤」の延長線上に構想され、描かれたからである。³⁰ところが、慈円を大叔父としている九条道家は法性寺に嘉禎三年（二二三七）頃から仁治元年（二二四〇）頃にかけて慈円周辺圏を主導して、『治承物語』を六巻本に再編していく。それを祖本としている延慶本では小宰相の入水自死の場面を、

サテ念仏百返計唱テ、「南無西方極樂世界、大慈大悲阿弥陀如来、本願アヤマタセ給ワズ浄土ニ導給テ、アカデ別レシイモセノ中、「蓮ノ身トナシ給ヘ」トテ、千尋ノ底ヘ入給ヌ。

二重施線のように現世の男女間の熱烈な愛情を描いているのは、「不適切」であるとの指摘がなされている。³¹この「不適切」との言説に留意してみたい。

慈円の後任として西山の往生院院主に就いた證空は、建保三年（二二二五）五月に『観経玄義分観門義』を開講した。すなわち天台智者大師が説いた観法を実践することで浄土を感じ得て聖者になると説く『観無量寿経』を善導が注釈した『観経疏』を逐次、解釈して説明している事実があった。證空は承久三年（二二二二）頃から往生院にて初めて不断念仏をおこない、嘉祿元年（二二三五）九月二十五日に寂した慈円の臨終の善知識となっている。

慈円圏のメンバーの一人である宇都宮入道蓮生が建保三年（二二二五）頃には證空に師事し始め、安貞元年（二二二七）七月六日には、山僧遠流訴に対して證空のために定家が公家たちに訴状を出した。『明月記』の同日の

条に、

善慧房上人(宇津宮隨遂の師なり)山門訴訟、其の数に入るの由之を聞く。周章して誓状を書き、且公家に進む。妙香院又披き陳べ給ふと云々。吉水の大僧正帰依、臨終善知識となすと云々。

施線で證空の弟子が宇都宮入道蓮生であったと記載し、三年前に慈円臨終の善知識であった證空の仏事をも併記している。『明月記』の当日の条からも慈円圈に参画していた定家、蓮生の娘を嫡子の為家の妻にし、既存の「世継物語」とは異なる「いくさ物語」の側面に手腕をそそぐ坂東武士の器量と京の廟堂で生誕して幼年期を過した蓮生の歌才(後年、蓮生の娘とあいたに生まれた為氏が編纂した『新和歌集』に採られことになる蓮生の数々の秀歌詠している。)を知っている定家が判然としてくる。

『治承物語』を取用しながら高倉天皇在位の嘉応二年(一一七〇)から後鳥羽天皇在位の、

九條右大臣八、文治二年三月十二日、ツイニ攝政詔、氏長者ト仰セ下サレニケリ。(中略)又頼朝関東ヨリヤウクウニメダク申ヤクソクシテ、世ノヒシトヲチヒヌト世間ノ人モ思テスギケリ。

(巻六——二七三ページ)

文治二年(一一八六)当時までの治世を『愚管抄』の別帖で叙述した慈円は、皇帝年代記に仲恭天皇紀を布置した。ここでは承久三年(一一三二)四月二十日に仲恭天皇が即位、九条道家が摂政になったことを「道理必然」との言辞を慈円は嵌入し、史論を成立させる。その時は、定家が六十歳であった。それから、十五年後の文治二年(一一三五)三月十二日に『新勅撰和歌集』を撰進し、同年五月二十七日に嫡子為家の義父である宇都宮入道蓮生の嵯峨中院別荘に『百人一首』の原型の「小倉山荘色紙和歌」をしたためた。延慶本が祖本としている六巻本『治承物語』へ再編するための慈円周辺圏は嘉禎三年(一一三三)頃から仁治元年(一一四〇)であった。慈円周辺圏の空間の法性寺の伽藍には、證空のために造営した遣迎院があった。遣迎院に安置されていた阿弥陀如来像の像内の納入品の交名には源平争乱の戦死者の名が記載されている。交名の一紙に「経盛・忠度・有盛・行盛・基盛・経盛・通盛・惟盛……(中略)……平氏中宮(建礼門院)」とあって、圈点を付したように「通盛」の名も連ねられ

ていた。⁽³²⁾ それ故、延慶本では前掲した小宰相の入水自死の場面で二重施線部の「アカデ別レシイモセ中、一蓮ノ身トナシ給へ」と小宰相は唱えたのであった。慈円周辺圏の一員である定家や蓮生等によって文飾されていると思われる。

歌人としての定家が、慈円周辺圏に参画していく過程を辿りなおして本稿を括ることにはしたい。

定家が選定した『百人一首』に自己の「来ぬ人を松帆の浦の夕風に焼くや藻塩の身もこがれつつ」を入れた。「夕風」の海を染める残照の色が鮮明であり、「こがれつつ」には胸にもこげるほどの恋い慕う意がこめられており、定家の頂点を示す妖艶な歌なのである。上の句の「来ぬ人」が来ない恋人を待っている身を焦がす女の気持ちであるからには、小宰相の心情に通じてこよう。また鎌倉將軍の源実朝へ承元三年（二二〇九）に定家が送った歌論『近代秀歌』で言及している「本説による物語的構想（中略）『源氏物語』や漢詩文漢詩文も「妖艶」の媒介」として定家の手法とも重なる。その一年後より慈円圏で「頼朝の物語」を内実とする『治承物語』が創出されていくわけである。

「本歌取り」の修辞は、

海辺残月

わたつみもひとつに見ゆる天の戸のあくるもわかず澄める月影

(二七一七)

月の光をもとに海上遠望した定家の歌は、物語の小宰相が入水自死する直前の場面、

ヤワラ舟ノハタニ立給タレバ、漫々タル海上ナレバ、月オボロニカスミワタリテ、……
と類同する。「伊呂波四十七首二度」の恋七首には、

瀬をはやみ岩ぎる浪の夜とともに玉ちるばかりくだけでぞふる

(三〇八四)

との歌が載っていて、『百人一首』に採られた、

瀬をはやみ岩にさかるゝ滝川のわかれても末にあはんとぞ思ふ

崇徳院の歌を本歌として、何としてでも行く末はあの人に逢いたいとの熱烈な恋慕の情が際立つ。三〇八四番歌

は小宰相の心象に通じており、定家が慈円周辺圏で小宰相の哀話を潤色していた証憑となってくるであろう。

四部合戦本では「北の方」と一貫している。さて、ところが前掲したように、延慶本では、

小宰相殿ハ妾ニテオハシケレバ、一舟ニハ住給ワズ、別ノ御舟ニヲキ奉テ、時々通給テ、三年方間、波ノ上ニ浮ビ給テケルコソ哀ナレ。

圏点を付したように小宰相を「妾」とも称している。延慶本では「一門全体の中ではむしろ疎外されていた小宰相が、唯一の頼りであった通盛を失って途方にくれ、ついに入水に至るといった展開を読みとることができるだろう。」との解釈がなされてもいる。³⁴⁾この相違から、慈円周辺圏では「妾」としての小宰相の身分を付加して通盛との死別を知って、入水自死していく動機をより強調しながら迫真的に仕組んでいたのである。

慈円周辺圏に参画した定家を基軸にして、平通盛と小宰相との仲をとりもつた上西門院統子の出自の天皇家、慈円周辺圏を主導した摂関家の九条道家との「相関図」②を次に掲出してみよう。

〔相関図〕②から、平通盛の姉妹の一人から生誕したのが修明門院重子であったことが知られる。しかも通盛の兄弟の一人が忠快であり、重子は順徳天皇の母、当天皇の父である後鳥羽天皇の祖母こそが小宰相と通盛との仲をとりもつた上西門院統子であった。統子が赦したのは文治五年（一一八九）七月二十日、六十四歳であった。二十八歳の定家は同年十一月十三日に待望の左近衛権少将に昇任する。その十年前の治承三年（一一七九）三月十一日に内昇殿を許され、翌年正月五日、従五位上に叙せられているからには廟堂で時めく平家一門の通盛をはじめ縁戚関係のある人々の動向を定家は知悉しており、通盛敗死の前年の寿永二年（一一八四）二月十九日には正五位下に昇任し、殿上人として仙籍に列しているの、平家一門の衰亡との対比できた。

次に定家の日録である『明月記』から窺つていこう。

父俊成が危篤との知らせを知つた定家は、『明月記』元久元年（二二〇四）十一月二十六日条で、

仰せて云ふ、忿ぎ法性寺に渡らんと欲す。他事を知るべからず。早々に渡すべしと。御病の躰、誠に恐るべし。御身頗る熱し。又右方の御顔、頗る腫る。俄に斯の如きの後、御飲食総じて之れ無しと云々。

病状が悪化したので俊成は法性寺へ移りたいと訴えた。そこで見舞つた後、

未明以前に家に皈る。巳の時、巳に法性寺におはします由を聞く。（中略）法性寺に参す。

午前十時には法性寺へ居るとの連絡があつて、出向いている。ところが「日来病者、冷氣堪へ難に依り、退去し九条に宿す。」とあり、翌日の十一月二十七日には、

早旦、御気色に参す。昨日に似ず、御言談あり、和歌の沙汰に及ぶ。

とあるので、俊成は和歌等をめぐつて面談する程になっていた。が、同月三十日には、法性寺に赴こうとしていたところへ、

遅明に参せんと欲する間、おしとど遮めて使あり。周章して馳せ参す。念仏の音高く聞え、巳に眼を閉ぢしめ給ふと

云々。

使者が来て、出向くと臨終で、その模様を詳細に記載していく。翌月の十二月六日条には、

今日、初七日なり。御遺言に依り、阿弥陀迎接の法華を供養す（二部）……
 俊成の遺言があつて、それに則つて定家は追善供養をし、同月三十日「終日、写経す。（中略）尊師に語りて布施を……」と記載しており、仏事善行をしきりにしている。

俊成の最期を看取つた空間である法性寺は、定家をして、「冥蹟二法」の道理の「冥」から慈円周辺圏の文事に関連づけられていく素因の一つであつた。

法性寺に組織した慈円周辺圏を主導した道家から十二代前の左大臣藤原忠平が延長三年（九二五）に、天台座主尊意を開山としており、藤原氏の氏寺となつていった。『愚管抄』別帖に於いては時宜相応につくり替えられていく多様な道理を慈円は説諭し、道家の姉の立子から生誕した皇子が即位して道家が摂政になつたことを末代の道理として、『愚管抄』の皇帝年代記に仲恭天皇紀を布置する。当天皇紀に「道理必然」との言辞を嵌入して『愚管抄』を慈円は成立させた。³⁵その後、『愚管抄』を精読している道家は『治承物語』を六巻本に再編する。（相関図）②で判然とするように、四条天皇の外祖父が道家であつた。法性寺の伽藍にある遣迎院で宝治元年（一二四七）十一月二十六日に證空は七十一歳で寂した。證空の遺骨は西山の往生院の傍に宇都宮入道蓮生が願主となつて多宝塔におさめられ、観念三昧院と号して今日に至つてゐる。西山義は天台教学の観念を軸とする本覚思想を内在させ、仏性の具有と仏の慈悲によつて救われるとする教義である。³⁶證空を開祖とする西山義は「弥陀の本願を帰したうえは、諸行も往生行として有効」と説き、「政治や文化の担い手」に宣布していく。³⁷西山義の中軸に据えられている天台教学の宣揚を担つたのが源信であつた。『源氏物語』の宇治十帖には源信に擬されたとも見なされている「横川の僧都」が登場している。宇治川で浮舟は入水自死したと思つて当人の浮舟の一周忌を営んだ。

「横川の僧都」は薫とかかわる役目を担わされている。宇治十帖の「蜻蛉」巻には、

大将殿の、かろうしいと忍びてかたらいたまふ、小宰相の君といふ人の、容貌などきよげなり、心ばせある方とおぼされたり。

薫の「思い人」として小宰相が描かれている。「手習」巻にも「大将のかたらひたまふ宰相の君しも、このことを

聞きけり。」・「大将のかたらひたまふ宰相の君しも……」等、薫が中宮御所に伺候した時に、

小宰相に、忍びて、「大将、かの人ことを、いとあはれと思ひてのたまひしに、いとほく、うち出でつべかりしを、……

としている部分もあつて、「小宰相」が点描されていた。浮舟の「入水」と思っていた薫を象っている。それ故に、小宰相の哀話で描いた「小宰相」の名と小宰相の入水。自死とは呼応している。宇治十帖の前後の展開では相違するが、見立ての修辞が歌人定家に凝らされていく余地もあるだろう。そのことは小宰相の入水自死したのと同一の海上を描いている『源氏物語』の「明石」巻に、

はるばるとものごとどこほりなき海づらなるに、なかなか、春秋の花紅葉の盛りなるよりは、ただそこはかとなう茂れる蔭どもなまめしきに、

とある文に準拠して、二十五歳の定家は「二見浦百首」に載っている、

見わたせば花紅葉もなかりけりうらのとやまの秋の夕暮

(一三五)

を詠じていた。一三五番歌は、『新古今和歌集』(巻第四・秋歌上)に採られる有名な三夕の歌であるので、当該歌も念頭において本説取りの修辞を援用して小宰相の哀話が創られていくことも想定されよう。

西山義では、「一念の信に決定往生して浄土に往生する」と説く。発願すれば絶対に往生する「一念往生」なのである。³⁸⁾ 證空も参画した慈円圏で創出された『治承物語』にも具現され、前掲した四部合戦状本のように小宰相が「南無西方極樂教主、弥陀善逝、必ず一仏浄土へ迎へたまへ」と唱えたのであった。

定家は十四歳で侍従になり、六十六歳の安貞元年(二二七七)十月二十二日には正二位にのぼりつめたので既述した西山義の宣布していく圏点の「政治」の側で活躍していった。前掲した圏点の「文化」の側も、七歳にして清涼殿で詠歌したのを手始めに廟堂の内外で父の俊成を介して非常に活発化していった。慈円寂後の嘉禎三年(二二三七)頃から法性寺の空間で慈円周辺圏の文事に濃厚に反映されていく。嘉禄元年(二二三五)二月十六日に『源氏物語』五十四帖を藤原定家は書写し終え、さらに十年経過した七十四歳の嘉禎元年(二二三五)五月二十七日には息子の為

家の義父である宇都宮入道蓮生の要請で、嵯峨別荘の障子に『百人一首』の原型である「小倉山荘色紙和歌」を草しもしたのは既述した。さまざまなかたちで『百人一首』は、その後の廟堂内外の文化に影響していくことになる。十七歳の時に『別雷わけいかずみのやしろ社歌合』で歌人となつてより、家集『拾遺愚草』をはじめ歌論『近代秀歌』等や古典の注釈・校勘誤りを治す等をしており、廟堂でも定家は屈指の文化人であつたので、『明月記』建暦二年（二二二二）正月二十二日の条に、

月斜に霞深くして春尚浅し 山雲初めて曙色おもむろに徐に分る

野村の雨後何ぞ望を遮る 只早梅の風底に薰る有り

等と作詩もしているからには、「文化」の側では終生に亘つて顕著な活躍し続けたのであつた。

信仰では『明月記』嘉禄元年（二二三五）正月十五日の条で「念仏以後、阿弥陀経を書き奉る。」と記載し、寛喜元年（二三三〇）八月十二日では、

今日、止観第七巻を書き終え、第八巻を書き始む（十五枚）

『摩訶止観』の書写の善行をし、天福元年（二二三三）十月十一日に、

戒師、頂を剃り給ふ。（中略）戒師袈裟を取り、誦文を授けらる。之を戴きて返し奉る。

と記載している。定家は出家した。慈円周辺圏に参画していく直前の文暦二年（二二三五）五月十三日と十四日の両日に亘つて定家が『土佐日記』の書写をしていた事実が写本奥書に「不堪感興自書写之昨今二テ日終功」と明記されている以上、六巻本『治承物語』を祖本とした延慶本が描くように往生極樂の偈を誦し、前掲したように通盛への哀惜の思いを抱きつつ小宰相が入水自死していく場面を、

サテ念仏百返計唱テ、「南無西方極樂世界、大慈大悲阿弥陀如来、本願アヤマタセ給ワズ浄土ニ導給テ、アカテ別レイイモセ中、「一蓮ノ身トナシ給ヘ」トテ、千尋ノ底ヘ入給ヌ。

と描かれているのは、定家の信仰心と同一なのである。しかも二重施線部の一ノ谷の戦いで敗死した通盛と共に一蓮托生したいとの小宰相の言辭は、『治承物語』にはなかつた。仲恭天皇紀で「道理必然」との言辭を嵌入し

て九条道家が摂政に就いたことを以って『愚管抄』を成立させた。慈円の説く「政治」を熟知している道家が、四条天皇の外祖父として領導している治世のもとで、『新勅撰和歌集』編纂をはじめ物語や仏典等の書写校勘の「文化」の面で定家が尽瘁しているなかで、慈円周辺圏で小宰相の哀話に定家も潤色したと思われる。

〔末尾〕

〔引用資料の典拠〕

- 『愚管抄』は『日本古典文学大系』（岩波書店）、『玉葉』は高橋貞一著『訓読玉葉』（高科書店）、『明月記』は今川文雄『訓読明月記』（河出書房新社）、『玉葉』は今川文雄校訂『玉葉』（思文閣出版）、『栄花物語』は『新編日本古典文学全集』（小学館）、『新古今集』は『日本古典文学全集』（小学館）。延慶本『平家物語』は『校訂延慶本平家物語』（汲古書院）、屋代本『平家物語』は『屋代本高野本対照・平家物語』（新典社）、四部合戦状本『平家物語』は『訓読四部合戦状本平家物語』（有精堂）、屋代本『平家物語』は『屋代本高野本対照・平家物語』（新典社）、『今鏡』は『今鏡全釈』（福武書店）、『源平盛衰記』は『源平盛衰記』（芸林舎）、定家の歌は『藤原定家全歌集』（筑摩書房）、『土佐日記』、『源氏物語』、『建礼門院右京大夫集』は『新潮日本古典集成』、慈円の歌は『拾玉集』（明治書院）、『新勅撰和歌集』は『久會神昇・樋口芳麻呂校訂新勅撰和歌集』（岩波書店）。

註

- 〔1〕拙稿『平家物語』初期生成の一側面——『栄花物語』から定家へ——（『熊本学園大学 文学・言語学論集』第二八巻第一号、二〇二一年六月）
- 〔2〕拙稿「『平家物語』初期生成と藤原定家——編纂の視点から——」（上）（下）（『熊本学園大学 文学・言語学論集』第五・五二号、二〇一九年二月・二〇二〇年六月）
- 〔3〕拙稿「今様をうたう徳大寺実定の意味——屋代本『平家物語』から——」（『熊本学園大学 文学・言語学論集』第四九・五〇号との合併号、二〇一九年六月）
- 〔4〕拙著『第二部 第八章 治承物語の復元』（『愚管抄の言語空間』汲古書院・二〇一四年）
- 〔5〕拙著『第九章 皇年代記の書き継ぎについて』（『愚管抄の創成と方法』汲古書院・二〇〇四年）

- [6] 註〔5〕同書〔第II部 愚管抄の形成〕
- [7] 註〔5〕と同じ。
- [8] 註〔5〕と同じ。
- [9] 註〔4〕同書〔第II部 第九章 再編された六卷本治承物語と九条道家〕
- [10] 註〔9〕と同じ。
- [11] 註〔2〕と同じ。
- [12] 註〔4〕同書〔第II部 第七章 治承物語と西山の空間〕
- [13] 註〔4〕同書〔第III部 第十二章 屋代本平家物語の建礼門院の往生〕
- [14] 「忠快小論——頼朝と慈円を繋ぐ人物として——」（『日本文学研究』第四三三号・二〇〇四年）
- [15] 『評註 建禮門院右京大夫集全釋』（武蔵野書院・一九七六年）一四四ページ
- [16] 糸賀きみ江著『建礼門院右京大夫集・惜春と鎮魂の譜』（武蔵野書院・二〇〇三年）二〇〇ページ
- [17] 註〔2〕と同じ。
- [18] 三三 5 『源氏物語』と藤原定家、親忠女及びその周辺（『藤原定家とその時代』（岩波書店・一九九四年）三二五ページ
- [19] 松尾葦江は「第三章 五 二 小宰相記事について」で「読み本系諸本が王朝物語への憧憬を示す傾向がある、その好例である」としている（『平家物語論究』（明治書院・一九八五年・二七七ページ）。他方、田仲洋己は「新古今歌人の時空意識について——藤原定家を中心に——」で「王朝物語との接点を持つ名所が相当数見られるという点である。（中略）『新勅撰集』における具体化に傾注したのが、地名・名所を通じて日本国土の在り方を描き出すという視座があったのではないであろうか」との見解を披歴している（『中世文学』第六六号・二〇二一年六月）。後述する『土佐日記』の空間と小宰相の入水する海上とも重なり、定家が潤色する要因になる。
- [20] 「土左日記私考（上）（中）（下）」（『文学』第四九卷第五号・第六号・第七号・一九八一年五月・六月・七月）
- [21] 『延慶本平家物語全注釈 第二末（巻五）』（汲古書院・二〇一三年）四七八〜八二二ページ
- [22] 明月記研究会「『明月記』（治承四年）を読む」（『明月記研究』（第五号・二〇〇〇年十一月）
- [23] 註〔2〕と同じ。
- [24] 田中裕著「第十一章 新古今的歌風の特質」（『後鳥羽院と定家研究』和泉書院・一九九五年）二〇九ページ
- [25] 『百人一首の作者たち・王朝文化論への試み』（角川書店・一九八八年）二二九ページ
- [26] 「二つの衣」と「白き袴」——小宰相と能登殿——（『古典教室』第7号・一九七四年六月）

- [27] 村山修一著『藤原定家』(吉川弘文館・一九八三年) 四三ページ
- [28] 註(4) 同書「第II部 愚管抄と治承物語の空間」
- [29] 菊池勇次郎著「II 西山義の成立」(『源空とその門下』法蔵館・一九九五年) 一五二ページ
- [30] 五十嵐隆幸は「通盛の罪に触れて墮地獄の可能性があろうとも念仏の功力によって「還テ当来世々、讚仏乗ノ因、転法輪ノ縁トナラセ給フベシ」とするのが、これは狂言綺語の罪に関わる言葉であるはずで、ここに用いるのは不適切か」とする(『第三部 證空とその門流の浄土思想』『西山浄土教の基盤と展開』思文閣出版・二〇一〇年) 二二七ページ
- [31] 註(21) 同書『延慶本平家物語全注釈 第五本(巻九)』六三二〜三三三ページ
- [32] 青木淳著『遣迎院阿弥如来像内納品資料』(国際日本文化研究センター・一九九九年) 一八一ページ
- [33] 藤平春雄著「第二章 II 四「余情妖艶の躰」」(『藤平春雄著作集・第1巻』笠間書院・一九九七年) 二八五〜二八六ページ
- [34] 『四部合戦状本平家物語全釈・巻九』(和泉書院・二〇〇六年) 四三四一ページ・四三七七ページ
- [35] 註(5) と同じ。
- [36] 註(30) 同書「第三部 西山浄土教の一念往生思想と天台本覚思」
- [37] 上田良準著「第一章 十 梵鐘名と胎内文書」(『証空——白木の念仏』講談社・一九九二年)
- [38] 註(36) と同じ。